

平成二十七年年度 修士論文

# 漢字仮名交じりの書

-書道教育における重要性と指導方法について-

大学院教育学研究科 教科教育専攻  
美術教育専修（書道） 143604

齋藤尚子

## 目 次

はじめに	1 -
第1章 書道教育における漢字仮名交じりの書の課題	1 -
第1節 漢字仮名交じりの書とは	1 -
第2節 美術教育における自由画教育運動	2 -
1) 山本鼎とは	2 -
2) 山本鼎の唱える“自由画”	3 -
3) 自由画教育運動の展開と終息	4 -
第3節 自由画と漢字仮名交じりの書	5 -
第2章 授業実践の分析考察と“個の表現”に繋がる指導の提案	7 -
第1節 長尾高等学校における実践の分析考察	7 -
1) 生徒の実態	7 -
2) 第1時限 -漢字仮名交じりの書について-	7 -
3) 第2時限 -“書き分け”を学ぶ-	13 -
4) 第3時限 -創作活動1-	18 -
5) 第4時限 -創作活動2-	22 -
6) 第5時限 -創作活動3-	24 -
7) アンケート集計結果	31 -
第2節 “自由”がもたらす効果について	35 -
1) 授業考察とアンケート結果から分かること	35 -
2) より発展的な指導の提案	36 -
第3章 書道教育における漢字仮名交じりの書の重要性	38 -
おわりに	39 -
資料	41 -
参考文献	66 -

# 漢字仮名交じりの書

## -書道教育における重要性と指導方法について-

大学院教育学研究科 教科教育専攻

美術教育専修（書道） 143604

齋藤尚子

### はじめに

漢字仮名交じりの書は、高校書道において漢字や仮名の学習と並べて必修と定められており、“個性豊かな表現”の尊重を重視している。しかし個性豊かな表現の尊重のために“自由さ”を求め過ぎてしまうと“遊び”のような存在になってしまい、逆に“学び”を重視して漢字や仮名の書の学習のような指導方法をとると個性豊かな表現を尊重することは難しくなる。「如何にして授業の中に自由を取り入れて、“学び”と“自由”を共存させることが出来るかどうか」が、漢字仮名交じりの書の指導における課題であると私は考える。この課題を克服するためにはどのような指導を行う必要があるのだろうか。“学び”と“自由”の共存の課題の克服、そして最終的には“個性豊かな表現”に繋がるような指導を目標として指導計画を立て、実践を行った。

本論では、漢字仮名交じりの書の指導における問題について考え、高等学校における実践の分析考察を踏まえて“個性豊かな表現”に繋がる指導を提案し、書道教育における重要性について述べていきたいと思う。

---

<sup>1</sup> 『高等学校学習指導要領』より、書道 II では“個性豊かな表現”の能力の育成を目標としている。

## 第1章 書道教育における漢字仮名交じりの書の課題

### 第1節 漢字仮名交じりの書とは

漢字仮名交じりの書とは、短歌や俳句・詩・言葉・歌詞などの漢字・平仮名・カタカナが交じった文章を題材とした書のことを指す。近年ではローマ字や算用数字が含まれる作品も珍しいものではなく、書かれる文字が漢字と仮名だけではないことから、書道においては主に『調和体』や『新和様』『近代詩文書』、書道教育においては『漢字仮名交じりの書』という呼称が用いられている。漢字仮名交じりの書は定義が曖昧な部分があるため、何年に誕生したのかという厳密なことは定かではないが、おおよそ大正末から昭和にかけて取り組まれ始めた。そして終戦後、急激に欧米文化が流れ込み、書道界の中にも美術的な思想が芽生えたことにより、漢字仮名交じりの書を含むいわゆる“現代書”（漢字仮名交じりの書・前衛書・少字数）の運動が盛んになったのではないかと考えられている。

この漢字仮名交じりの書が、学習指導要領の改訂により高校の芸術科書道に単元として加えられたのは平成元年のことである。暫定期間を経て、平成六年度からは全面的に授業に取り入れられるようになった。漢字仮名交じりの書は書写能力よりも自己表現・創造性を重視した単元であり、漢字の書や仮名の書の単元と比較して、より“個性豊かな表現”へとつながる指導が可能な単元である。また、「書道は整った美しい字を書かなければならない」という概念をもつ高校生の“書道への見方”を変える良い足掛かりとなることが期待できるほか、自由に読み書きできる身近で親しみやすい題材を扱うことから、生活に即して書表現を楽しむことも期待できる。

次に、漢字仮名交じりの書の重要性と指導の課題について改めて考えるきっかけとなった、自由画教育について述べていきたい。本学大学院で実施されている講義内で初めて、美術教育の歴史の中に“自由画”“自由画教育運動”というものが存在するとことを知った。高校書道における漢字仮名交じりの書の在り方を模索していた私は、その“自由”という言葉に興味を抱き、今回自由画教育を取り上げることとなった。第2節では自由画と漢字仮名交じりの書の関連性、そして、そこから発見した漢字仮名交じりの書の指導における課題について述べていくものとする。

## 第2節 美術教育における自由画教育運動

### 1) 山本鼎とは

自由画教育運動の前に、まずは山本鼎（1882-1946）（図1）という人物について触れておきたい。山本鼎は明治15年（1882）10月24日愛知県岡崎市で生まれ、その後東京に移住。小学校を卒業したのち浜松町の木版工房で住み込みの弟子となり、版画職人として自立する道を歩み始める。山本が16歳のとき、父が長野県小県郡神川村大屋（現上田市）に医院を開業し、家族で長野県に移住した。木版工房で9年間の年限を定めて行う奉公を終えた山本は、明治34年（1901）、東京美術学校西洋画科<sup>2</sup>に入学した。その後フランス留学を経験し、帰途にシベリア鉄道を使用、旅費づくりのため5ヶ月ロシアに滞在した。そこで農民美術と児童画展を見たことが、後の自由画運動と農民美術運動の大きなヒントとなったとされる。帰国後大正7年（1918）には、日本創作版画協会を設立、日本画・洋画と並ぶべき版画の独自性を主張するなど今日の創作版画の隆盛をもたらすことに貢献した。また同年、長野県小県郡の神川小学校で『児童自由画の奨励』の講演を行ったことを契機に、子供に自由に描かせる自由画教育運動を推進することになった。また、山本鼎は描きやすい画材の研究をかさね、クレパスを考案したことも知られている。旧来の手本を模写させるだけの美術教育を批判し、子供に自由に描かせる必要性を説いた自由画教育運動。農閑期に工芸品を作り副収入を得ると同時に、美術的な仕事を通して農民の文化と思想を高めようとする農民美術の運動。この2つの運動によって山本は大正デモクラシーの先駆者の一人として位置づけられている。



図 1

<sup>2</sup> 1887年創立の美術専門学校。1952年に東京芸術大学に包括され、同美術学部の前身となった。

## 2) 山本鼎の唱える“自由画”

大正期における“自由画”とは、写生画や生活画のことを指す。手本を模倣して描くのではなく、実際に自分の目で見たものをそのまま表現することをいう。なぜ“自由”というキーワードが使用されたのかというと、自由画教育運動以前の美術教育における不自由画、つまり模写を最重要とする画に対照してのことである。学校へ通うようになった児童の画が面白くなってしまふ原因は、個性的表現が失われてしまう不自由な臨画教育にあると山本は考えていた。ここで、実際の自由画をいくつか紹介しておきたい。いずれも、神川小学校とともに自由画発祥の学校と見なされている、飯田市の竜丘小学校の児童生徒の作品(図2, 3)<sup>3</sup>である。

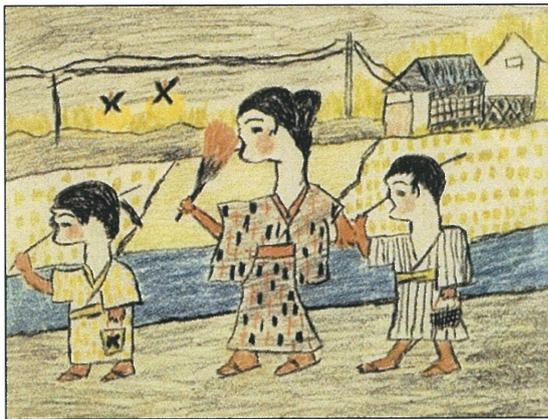


図 2

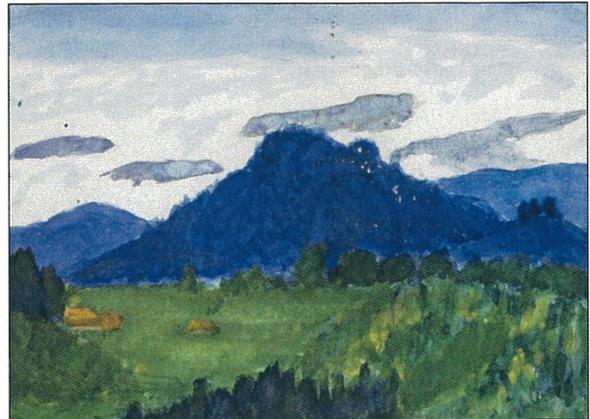


図 3

(図2) 1928年尋常小学校3年生女子の生活画である。蛍がりに出かける絵で、うきうきした期待感の感じられる楽しい絵であるとともに、クレヨンの黒でしっかりと輪郭をとって力強く描かれている。

(図3) 1920年高等学校2年生男子の作品であり、高等学校2年生とは今日の中学校2年生に相当する。水彩絵具を使用し、コバルトブルーを基調としたすがすがしい風景画である。

## 3) 自由画教育運動の展開と終息

山本は大正6年(1917)に『油絵ノ描キカタ』という著書を出版し、その中で「小学校の図画教育<sup>4</sup>が子どもの素朴さや自然観をこわしている」ということを指摘した。

<sup>3</sup> 『自由画の黎明 信州・竜丘小学校作品集』, 久山社, 1993, pp. 14-78 より引用。

<sup>4</sup> 絵や図を描く技法の習熟, 鑑賞力の発展を通じて, 造形感覚・創造的表現力・美術情操を養う教育。

「此書で私は、諸君を或る法則に導くよりも、諸君が或法則から解脱せられん事を要求して居ます。それは、諸君が『自然』に囚われて居るよりもより多く『教養』に囚われて居る事を察するからです。吾々は、小学校でいかゞわしい臨本教育にまづ自然観の清純さを穢されはじめ、だんだんに『人工』の趣味に毒せられて、終に自然を観る目が永久に眇むでしまうのです。私は諸君が心を常に『自然』の沃野に放牧する事によって『教養』を浄化し、直写の経験を重ねることによって筆々生氣を加えられんことを希望します。」<sup>5</sup>

大正7年(1918)に長野県の神川小学校で、教員約20人を前に「児童の絵画教育に就て」という講演を行った。その内容は「児童の絵画教育を一変させたい。学齡期前の児童の画はたいてい面白いが、それが学校へ通うようになると皆悪くなってしまう。このことから、原因は“臨本教育”にあると感じている。その臨本教育を廃し、自由画の奨励に努めたい。大人の認識を以て子どもの画に臨むことは大きな間違いである。」というものであった。そして翌年の大正8年(1919)4月に神川小学校で児童自由画展覧会が開催され、9月には第2回展が開催された。これが自由画教育運動の初段階であり、その後自由画教育運動は全国的なものとなっていく。また、山本鼎は学校教育制度外にいて、学校教育に関しては素人であった。そのため、自分たちがしていることが運動であると捉えてはいたが、自身の役目は“問題の所存を知らせること”であると考え、後に具体的な指導方法の研究がそれぞれの教員によってなされることを期待していた。それゆえに自由画の主張は、具体的方法として十分でないといふ教育者から批判されることも少なくなかった。阿部七五三吉<sup>6</sup>は「教材全部が臨画になってはいけませんが、臨画は必要である。なぜなら、自然に技巧そのものはないからである。画題選択を子供の自由にしたら、学校での教師の指導は成り立たない。」と、自由画教育に対して反対の意見を述べていた。

山本鼎は大正10年12月に、それまで彼が雑誌などに発表した論文を集め『自由画教育』と題して発刊し、その後は自由画教育運動から一応手を引いた状態になった。直接の原因は日本自由教育協会が運動組織として機能しなくなってきたためである。しかし、山本自身においても、自由画が運動課題から研究課題の段階へと移行していたのであった。『芸術自由教育』六月号の「編輯室」において山本は次のように書いている。

「吾々は常に無理をしないやうに自戒せねばならぬ。無理が通らうとすると實際道理が

<sup>5</sup> 金子一夫、『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』、中央公論美術出版、1999年、p382より引用。

<sup>6</sup> 阿部七五三吉(1874-1941) 東京高等師範学校及び附属小学校の図画担当者。

引つ込むのである。何等の調査機関を有たない私が、此上現行教育に鋒をむけてゆくとすると無理になる。されば、私は信念を批評の方に向けずに仕事（ウーヴル）の方に顕さうと思ふ。例へば、自由画教育なれば、実際に子供を教へて見るとか、手工教育の改善には、農民美術練習所の研究室に籠もり、其処での経験をつぶさに世に報告するとかいった風にである。——即ち私は私の極く自然な日常生活の報告書其ものをもつて自由教育を証明してゆかうと考えた事である。」<sup>7</sup>

山本はこの時点までに、自身の考えは言い尽くしたのであろうか。そしてこれから、さらに思想を厳密な体系に作りあげるのか、実践を通して美術及び美術教育を解明していくのかの岐路に立って、後者を選択したのである。実際に、その後自由学園<sup>8</sup>で講師として美術を教え始めていた。また、『赤い鳥<sup>9</sup>』で自由画の選別をしてその批評を書くという、一種の指導を行っていた。大正11年には、自由画についての発表は『赤い鳥』における選評以外にほとんどなくなったのである。

### 第3節 自由画と漢字仮名交じりの書

第2節第2項で述べたように、大正期における“自由画”とは写生画や生活画のことを指し、臨画するのではなく実際に自分の目で見たものを自由に表現することをいう。しかし現代では抽象画・デザイン画・空想画などさらに自由に創造性に富んだものがあり、写生画はむしろ不自由画と呼べる存在になってきている。高校書道における“自由”として最も有力である単元は漢字仮名交じりの書であると私は考えており、題材をもとにして自由に表現することが主たる活動である。つまり漢字仮名交じりの書とは、大正期における自由画と非常に近い存在なのではないだろうか。書道においても前衛書という、美術における抽象画・デザイン画・空想画と同じ様なジャンルのものが存在するが、未だ教育との関わりは無く、評価をすることが非常に困難なことから、高校書道の項目には加えられていない。漢字仮名交じりの書でさえ、高校書道の項目に加わってまだ三十年も経っておらず、尚且つ明確な指導方法も定まっていないことを考えると当然のことと言える。

次に同節第3項で取り上げた阿部七五三吉の「自然に技巧そのものはない」という言葉について。この言葉を私は「自由に描くだけでは技術は身につかない」と解釈をした。私自身、山本鼎の唱える自由画教育の理念に肯定的な意見を持っているが、この阿部の言葉は書道

---

<sup>7</sup> 金子一夫、『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』、中央公論美術出版、1999年、p405より引用。

<sup>8</sup> 東京都東久留米市学園町にある学校法人。大正10年（1921）に創立。

<sup>9</sup> 1918年から1936年まで刊行されていた童話と童謡の児童文芸雑誌。

教育においても同じことが言えるのではないかと感じた。漢字仮名交じりの書は“個性豊かな表現”を重要視しているが、ただただ自由に、生徒の好きなように書かせてしまっただけでは書く力が育たない可能性は大いにある。「漢字仮名交じりの書の単元は書く力ではなく、あくまで書道に親しみを持ち、“個性豊かな表現”を伸ばすことだけを目的とした単元である」と言うことは簡単だが、それでは生徒にとってこの単元は“遊び”のようになってしまう。漢字仮名交じりの書を専門として研究・実践している者として、また書道教育に携わる者として、漢字と仮名は“書道の勉強”で漢字仮名交じりの書は“遊び”という捉え方はして欲しくない。私は、自由と親しみやすさの中で漢字仮名交じりの書について学び、少しでも書道に興味を抱いて欲しいと考えている。

漢字仮名交じりの書の授業は、個性豊かな表現の尊重のために自由さを求め過ぎてしまうと“遊び”のような存在になってしまい、逆に現行の教科書に記載されている指導のように古典から文字を集字して作品を書くといった方法で自由さを無くしてしまうと個性豊かな表現を尊重することは難しくなる。古典を学ぶことは非常に重要であるが、創作においてあくまで古典は手助けする立場であるべきではないだろうか。「如何にして授業の中に自由を取り入れて、“学び”と“自由”を共存させることが出来るかどうか」が、漢字仮名交じりの書の指導における課題であると私は考える。この課題を克服するためにはどのような指導を行う必要があるのだろうか。“学び”と“自由”の共存の課題の克服、そして最終的には“個性豊かな表現”に繋がるような指導を目標として指導計画を立て、現在書道科の非常勤講師として勤務をしている大阪府立長尾高等学校において実践を行った。

## 第2章 授業実践の分析考察と“個性豊かな表現”に繋がる指導の提案

### 第1節 長尾高等学校における実践の分析考察

今回の実践は、長尾高等学校の生徒の実態を踏まえ、「いかに漢字仮名交じりの書に興味を持たせるか」「どのように指導をすれば書作意欲を高めることができるか」「書道に対して難しい・堅いというイメージのみをもつ生徒の見方を変える」という三点を指導の基盤に置いて学習指導案（資料1）<sup>①</sup>を作成し、それをもとに実施している。また、指導の際に教科書は使用せず、作品例や資料などは自身で作成・収集したものを使用している。

## 1) 生徒の実態

対象は書道 II の授業を選択している第 2 学年の 3 クラス（以降 A クラス B クラス C クラスとする）で、男子 62 名、女子 52 名の計 114 名である。1 クラスにおける実施時間は、50 分の授業を 5 回で計 250 分である。生徒はこれまで、1 年時に前任の指導者から九成宮醴泉名・蘭亭序・篆刻・曹全碑・漢字仮名交じりの書・漢字の色紙創作の指導を受け、2 年生の 1 学期に集王聖教序の臨書・うちわ創作、2 学期前半に書譜の臨書・宛名書きを学習している。1 年時の漢字仮名交じりの書は授業時間数の関係で 2 時間だけの実施となり、深い学習はできていないようであった。生徒の実態として、2 年生になったことにより少し慣れが生じ、1 年時よりも授業に対して消極的になっている生徒が多く、試験が無いことを理由に書道を選択した生徒が多い。また、書作能力の高い生徒は各クラスに数名程度である。クラスごとの実態としては、A クラスは比較的落ち着きがあり真面目に授業に取り組む生徒が多い。B クラスは全体的に落ち着きがなく授業中の私語や立ち歩きが目立つが、実技に対する意欲は低くはない。C クラスは書道に対する学習意欲が低く、興味のないものには全く取り組もうとしないという生徒が多く見られる。しかしそれに反して、他クラスと比べて書作能力の高い生徒が多い。

## 2) 第 1 時限 -漢字仮名交じりの書について- (資料 1-2)

1 時限目は漢字仮名交じりの書の概要について 1 年時に学習したことを振り返り、表現方法によって与える印象が変わるということを理解することが目標である。概要の振り返りの後、同じ題材で書風が異なる 3 種類の作品（図 1, 2, 3 54×40cm）を掲示し、それぞれの作品が与える印象について発問と解説を行う。解説だけでなく発問を交えることにより、生徒が授業を聞くだけでなく主体的に学習に取り組むことができるのではないかと考えた。作品例の題材は ONE PIECE<sup>10</sup>という漫画の中のセリフである『海賊王に俺はなる』で、この題材を選んだ理由として、前述した「いかに漢字仮名交じりの書に興味を持たせるか」が大きく関わっている。漢字仮名交じりの書の導入である 1 時限目において、生徒が普段馴染みのない詩や短歌等を題材とした作品を鑑賞させても、生徒の実態を考慮すると関心をもつ可能性は低く、また、教科書に掲載されている書家の作品を鑑賞させても、同じ結果になると予想した。そのため、現代の漫画の中でも知名度が高く、生徒が関心をもつ可能性の高いこの題材を用いることを決めた。また、書道に対して“堅い”というイメージのみを持つ生

<sup>10</sup> 『ONE PIECE』（ワンピース）

漫画家 尾田栄一郎による、海洋冒険ロマンを題材とした日本の少年漫画。日本国内に留まらず世界的な人気を博している。集英社発行の『週刊少年ジャンプ』にて 1997 年より連載をしており、現在単行本は 80 巻まで刊行、累計発行部数は 3 億 2000 万部を超えギネス記録にも認定されている。

徒の意識を変えることができるのではないかと考えたことも題材選択の理由の1つである。

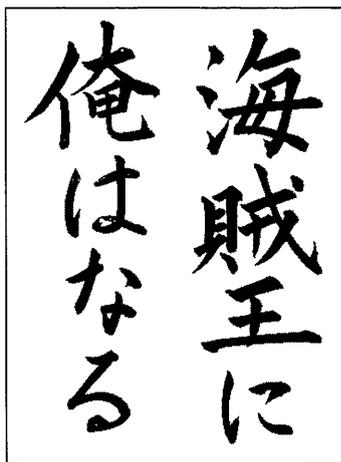


図4

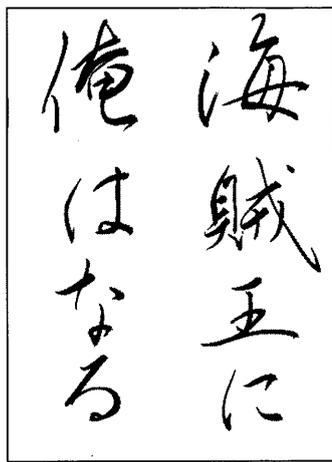


図5

作品例は1つ目はベースとなるように楷書で(図4)、2つ目は行書で全体的に線を細く(図5)、3つ目は北魏の楷書を意識して(図6)書作をしており、それぞれ作品の印象が大きく変わるように意識をして書作した。

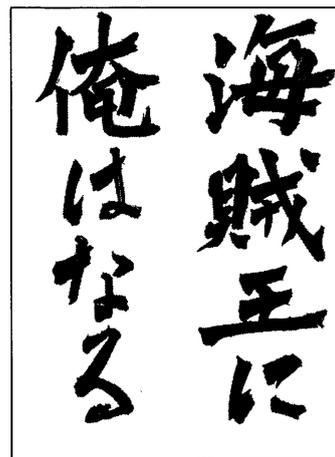


図6

1つ目の作品を見せた際、多数の生徒が反応を示し、作品に注意を引きつけることが出来た。続いて2つ目の作品を見せて「どのような印象を受けますか?」と発問を行うと、「弱そう」「海賊王にはなれなさそう」「弱そうやけど何か上品そう」という意見が出た。次に3つ目の作品を見せて同じように発問を行うと、「強そう」「絶対海賊王になれると思う」「“なりたい”って意気込

みを感じる」などの意見が出た。また「全部同じだと感じた人はいますか?」と質問を投げかけたところ、3クラスともそう感じた生徒はおらず、全員3つの作品に何かしらの異なる印象を受けたようであった。書風の解説をする前に、生徒自身で書風の変化によって作品の印象が変わるということに気づくことが出来たことから、解説の前に発問を行うことは有効であったと言える。また、1つ目の作品を見せた際に、生徒の注意を作品に引きつけることが出来、その後の2つの作品まで関心をもたせ続けることが出来たことから、漫画の台詞を題材としたことも有効であったと言える。しかしそれと同時に、授業内で漫画の台詞を題材とした作品例を提示することが、絶対的に有効であるとは言えないということも感じた。今回実施した授業では生徒の注意を引きつけることには成功したが、漫画という普段馴染みのある題材であるが故に、BCクラスでは授業中であるという意識が薄れ、数人の生徒に多少のざわつきが見られたのである。漫画の台詞の他に映画の中の台詞や流行曲の歌詞など、生徒にとって馴染みの深いものを扱うことにより興味関心を持たせることは可能であるが、その反面生徒の意識が書道から漫画や映画、曲、それを歌う歌手などに移ってしまい、

生徒間の雑談が生まれる恐れがあるということを想定に入れておく必要がある。

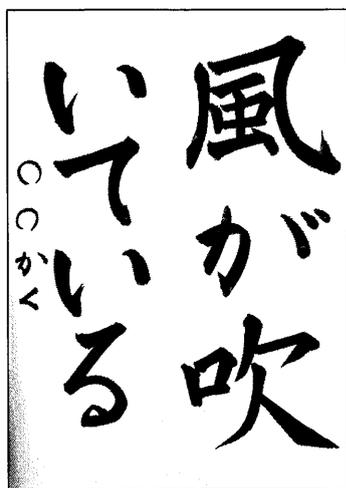


図 7

次に、『風が吹いている』という文章を半紙で2種類書作させる。一方は手本通りに、もう一方は自由作品として、書風や構成など文章以外は基本的に生徒の自由とし、『風が吹いている』という文章から自分が思い浮かべる“風”をそのまま表現して書くように指示をする。手本は模造紙に楷書で書作したもの(図7 79×54cm)を前方の黒板に貼り、視力が低く手本が見えないという生徒を除き、配布はしない。また、配付をした生徒に対しては、自由作品に取り組む際には手本を返却させるようにする。手本を配布すると、自由作品を書作する際に無意識のうちに手本を見てしまい、表現の幅が狭まってしまう恐れがあると考え、

今回はこのような方法をとった。また、自由作品ではあくまで“自分の風”を表現することを第一の目的としているため、漢字や文章の間違いを除いて、自由作品に対しての指導は行わないこととした。自由作品の作品例を掲示しなかった理由も同じである。ただし、風のイメージは固まっているがどのように表現すればよいか悩んでいる生徒には、指導ではなく、アドバイスの範囲に留めつつ書風や用筆についての助言を行った。

次に、生徒が書いた作品を何点か取り上げて考察をしていきたい。ここでは、手本を見て書いた作品をa、自由作品をbとし、bには自分がどのような風をイメージして書いたのかということを作品の裏に記入させている。作品bについてAクラスは全体的に、Bクラスは半数以上が図8図9のような「弱く書きました」「強く書きました」というもので、書作前に指示をした“自分のイメージする風”を書いたという印象は受けなかった。これは、指導側の指示が不明瞭であったということも考えられるが、最大の要因は授業の前半で3種類の作品を見せたことにあるのではないかと考えた。行書で細く書いた作品と北魏の楷書を意識して書いた作品を見せたことにより生徒は、自由作品では「弱い」ものか「強い」もの、

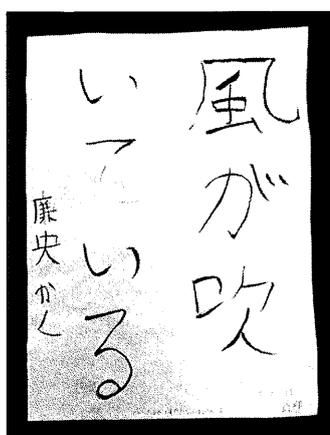


図 8

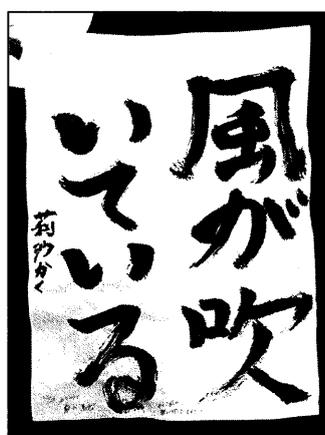


図 9

どちらかを“選んで”書かなければならないと考えてしまったのではないだろうか。特に A クラスは真面目に授業に取り組む生徒が多く、前半の説明も他クラスに比べて真剣に聞いていたため、他のクラスよりも「弱い」「強い」というイメージが強く頭に残ってしまっていたのではないかと考えられる。C クラスは前半の説明の際あまり集中できていなかったことに加えて、元々臨書よりも創作的な活動（うちわ創作や、他授業における T シャツペイントなど）を好む生徒が多いため、AB クラスと比較して自由度の高い作品が多く見られた。

続いて、印象的であった作品について取り上げていく。C クラスの生徒ハは作品 b (図 11) で「嵐の日の強い風」を表現した。ほとんどの生徒が書風だけを変えて作品 a と同じ構成で書作している中、作品 a (図 10) よりも『風が吹』を大きく、線を太く強調して書いている。2 行目の『いている』を書くスペースが狭くなり、強い風で押しつけられているという印象

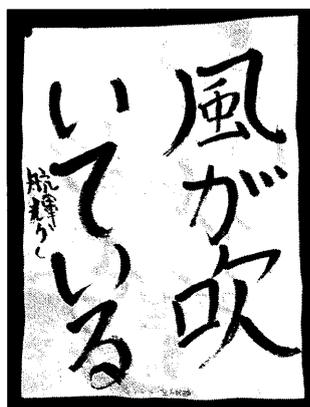


図 10 (生徒ハ-a)



図 11 (生徒ハ-b)



図 12 (生徒二-b)

を受ける。また、『風』や『る』で渴筆を入れたことでより一層風の強さを感じることができ、効果的であったと言える。同じく C クラスの生徒ニは、作品 b (図 12) において同じように嵐をイメージして書作しているが、生徒ハと比べて全体的に文字の大小の変化が少な

い。しかし『いている』の部分はより太く、強い線質で書かれており、渴筆の線も効果的である。生徒ハが強さと勢いを開放的に表現しているのに対して、生徒二の作品からは内に秘めた強さを感じる。同じイメージを持って書作をしているにもかかわらず、個々によって表現が異なり、与える印象も異なるということを改めて実感した2点であった。

Aクラスの生徒ホ(図13)と生徒へ(図14)の作品bは、共に「風に吹かれている様子」をイメージして書作している。字の角度は互いに異なるが、この構成で書作していたのは全

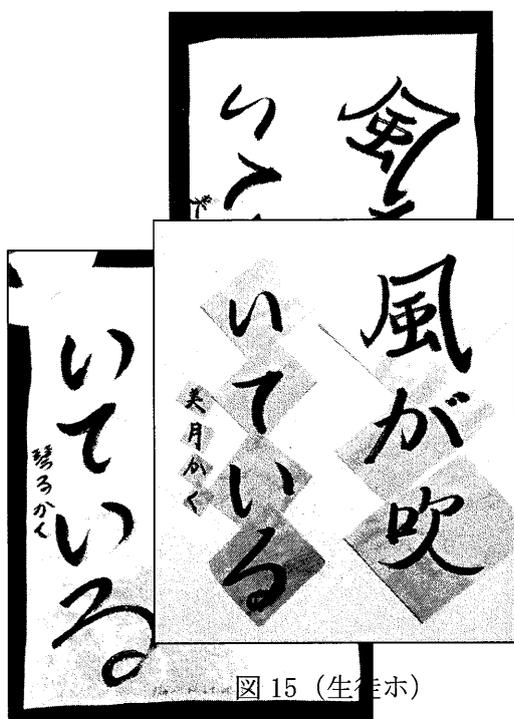


図15 (生徒ホ)

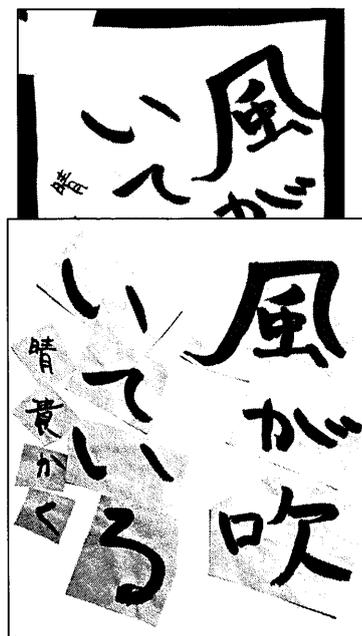


図16 (生徒へ)

クラス中この2名のみであり、また非凡な作品の少ないAクラスの中では印象に残る2点である。生徒ホは字を右回りで、生徒へは左回りで傾けている。字が全体的に整っていて技術的には生徒ホの方が上ではあるが、作品を見ていて、より“風に吹かれている”と感じたのは生徒への作品の方であった。何故そう感じるのか疑問に思い、一度両方の作品を1文字ずつバラバラにして傾きを直してみると、その理由が判明した。傾きを直した時、生徒ホ(図15)の方は『風』のそりの部分が少し長いですが、作品全体としての違和感を感じなかった。しかし、生徒へ(図16)の作品は『吹』を除く全ての文字がアンバランスで、傾きを直しても作品全体が傾いているように感じた。生徒への方がより“風が吹いている”と感じたのは、字の角度だけでなく、字の造形自体を変化させていることが大きな要因であったのである。生徒へが字形を意図的に変えているのか、無意識なのかは分からないが、“整った字”の概念にとらわれず自由に書作しているということを感じた。もう1人、生徒へよりも“整った字”の概念にとらわれずに書作していた生徒がいる。生徒ト(図17)は「ビューンと

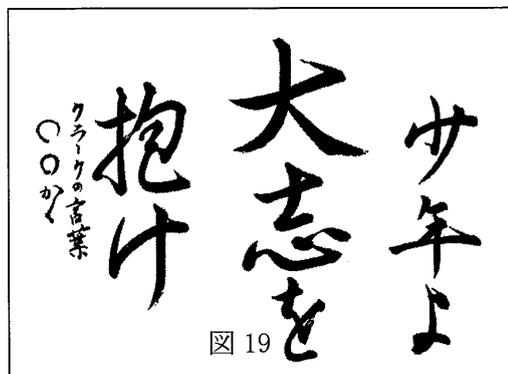
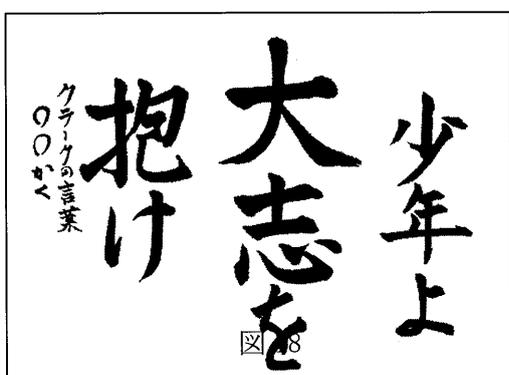
吹いている風」をイメージして書作しているが、『風』という字で他の生徒には見られなかった独自の書き方をしている。書風は自由としたが、この『風』では間違い字となってしまうため、机間巡視の際に気づいて指導するべきであった。しかし漢字仮名交じりの書の学習では、“個性豊かな表現”を重要視しているため、字が間違っていることの指摘だけで終わるのではなく、主体的に自分の書を表現しようとしたことを評価する必要があるのではないだろうか。

1 時限目の考察において発見した授業の改善点は、3 種類の作品を鑑賞させるタイミングである。自由作品を書作する前に作品を見せて説明を行ったため、「弱い」「強い」を選ばなければならないと考えてしまった生徒が多く見られたことから、3 種類の作品を見せるのは自由作品書作の後にする方が良いのではないかと考えた。授業の流れとしては、漢字仮名交じりの書について説明→『風が吹いている』の書作→3 種類の作品鑑賞・表現方法の説明で、このように実際に一度書作してから作品を鑑賞することによって、生徒も“表現方法によって印象が変わる”“こういう雰囲気にしたときはこの表現方法をするとよいのか”と表現方法についてより深く、納得して学ぶことが出来るのではないだろうか。また、今回『風が吹いている』の作品の1つを自由作品にしたのは、前述した書道に対して堅いというイメージをもつ生徒の意識を少しでも変えることが出来たら、という考えからであった。生徒

図 17 (生徒ト-b) 徒が書作している様子を観察していると、普段はつまらないという表情をしながら書作している生徒も、自身の自由作品を周囲と見せ合うなどして、楽しそうに取り組んでいるように見えた。その様子から、今回の指導方法が多少なりとも有効なものであるということを実感することが出来た。

### 3) 第2時限 - “書き分け”を学ぶ- (資料1-3)

2 時限目は、前時の作品例の鑑賞で学習した表現方法の違いとその効果について実践を通して理解を深めること、3 種類の書風に挑戦し“書き分け”を学ぶことが目標である。最初に前時の『海賊王に俺はなる』と同じ書風で書作した3 種類の手本(図18, 19, 20)を配



布する。題材は、前時で漫画の台詞を使用したことにより雑談が生まれたことから、生徒に認知されていて尚且つ漫画ほどの馴染みが無いと予想して、ウィリアム・スミス・クラーク<sup>11</sup>の『少年よ、大志を抱け』という言葉を選択した。

書作させる前に、3種類の書風の特徴についての振り返りを行い、筆法について前時よりも詳細な説明を行う。特に3つ目の北魏の楷書をベースにした作品(図20)は書いたことが無い生徒がほとんどであるため、起筆の角度や収筆の筆遣いについて細かく説明をする。本時では、上手く書くことよりも“書き分ける”ことを第一の目標としていることから、どのような筆遣いをすればベースとなる作品との差が生まれるかということをしつかりと指導する必要がある。ただし、あくまで“書き分け”が目標であるので、筆遣いが完璧でなくとも、それぞれの作品の雰囲気を変えることが出来ているということをも最も重要であるとしている。また、生徒は小筆を所持していないため落款も大筆で書かなければならず、普段落款で名前以外を書くことが無く慣れていないことを考慮し、今回の指導では落款は名前のみでも可とした。指導のメインは“書き分け”であり、50分という短い時間内で指導出来

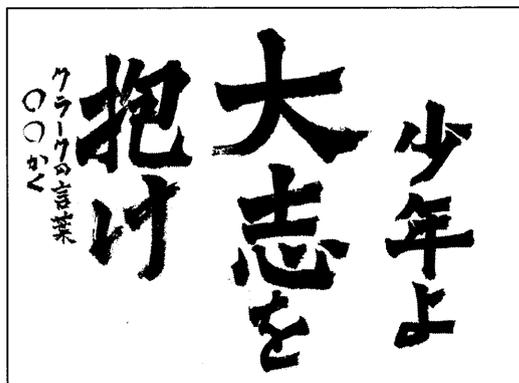


図 20

る内容が限られているということも理由の1つである。

次に、生徒作品の中から数点取り上げ、3項目に分類して考察をしていきたい。

---

<sup>11</sup> ウィリアム・スミス・クラーク (1826-1886)

「少年よ、大志を抱け」で有名な、アメリカ合衆国の教育者。化学、植物学、動物学の教師であり農学教育のリーダー。北海道開拓の父と言われており、日本ではクラーク博士の愛称で知られている

<①筆遣いが上手く、書き分けが出来ている>

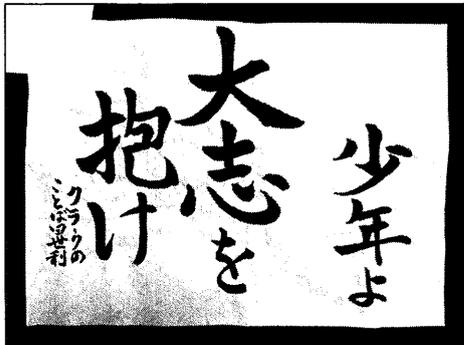


図 21-1

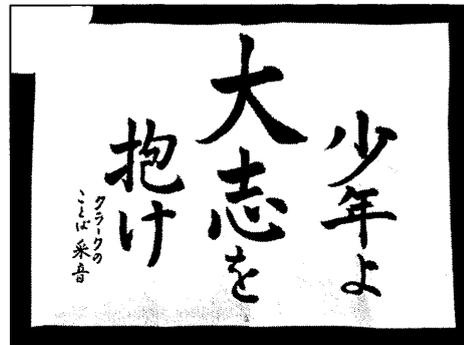


図 22-1

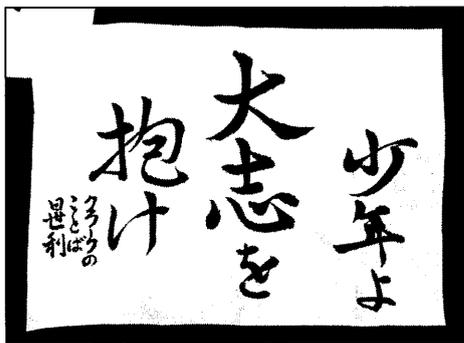


図 21-2

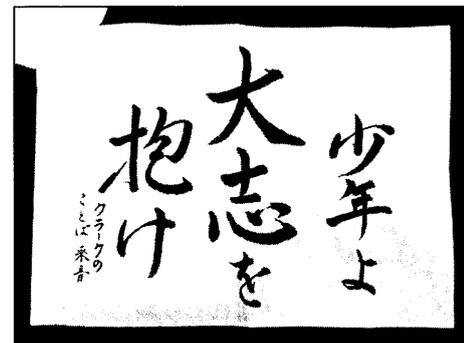


図 22-2

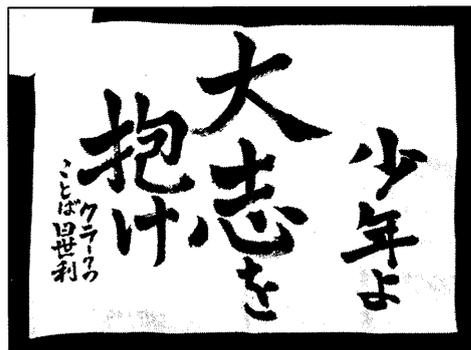


図 21-3

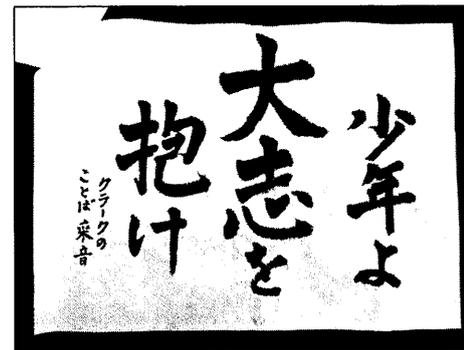


図 22-3

<②書き分けが出来ている>

(生徒ヌ)

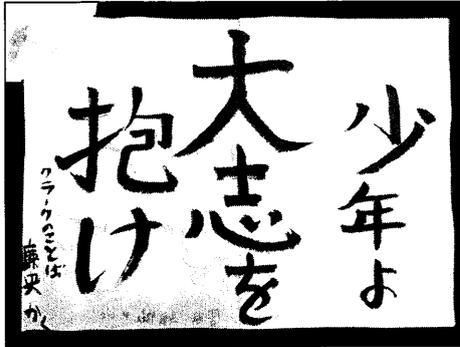


図 23-1

(生徒ル)

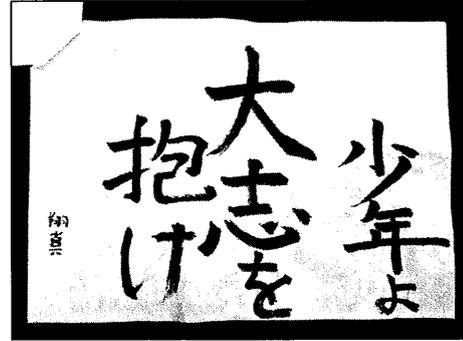


図 24-1

①②

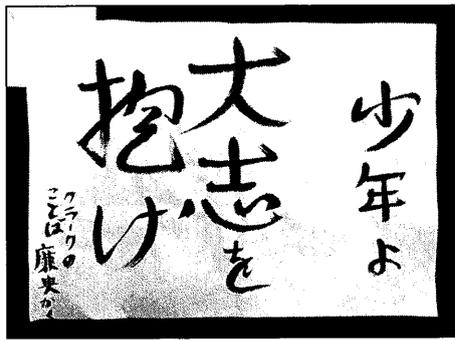


図 23-2

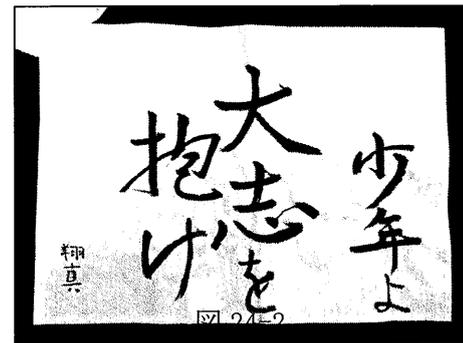


図 24-2

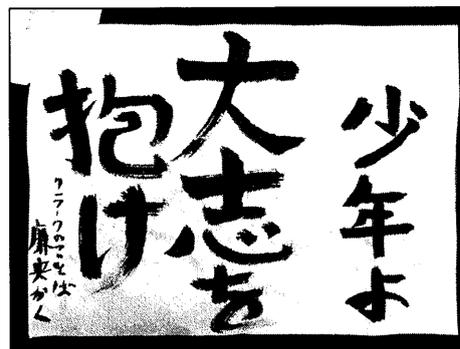


図 23-3

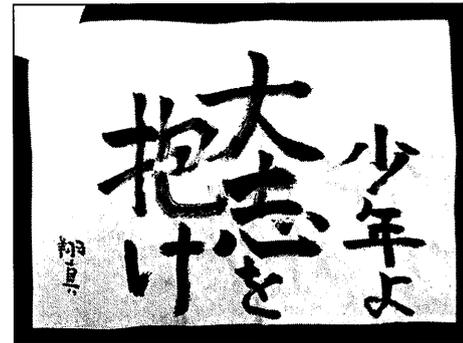


図 24-3

は書き分けが出来ている作品である。①の生徒チは『少年よ』の中心がずれており、生徒リは全体的に文字が小ぶりではあるが、どちらも上手く書き分けが出来ていて、作品として纏まっている。生徒リの3作品目は、もう少し全体的に鋭い線で書作することが出来れば、より他の2作品と雰囲気を変えることが出来たのではないかと感じた。②の生徒ヌ、生徒ルの作品は全体的な纏まりはないが、書き分けは出来ており3つの作品の雰囲気を変えることが出来ている。

<③ほとんど書き分けが出来ていない>

(生徒ヲ)

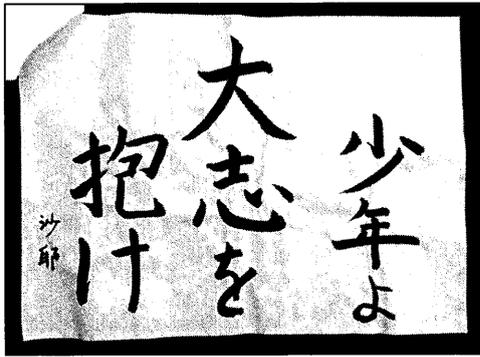


図 25-1

(生徒ワ)

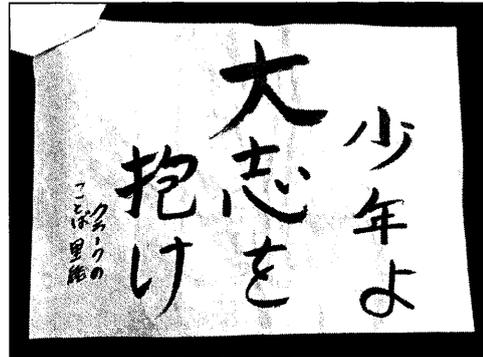


図 26-1

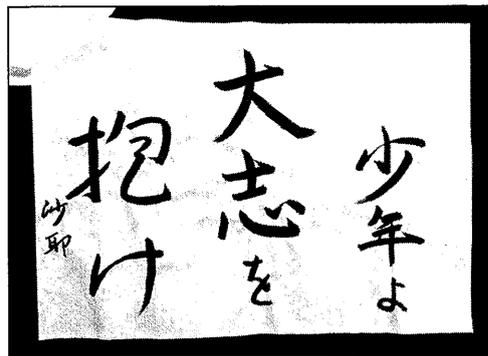


図 25-2

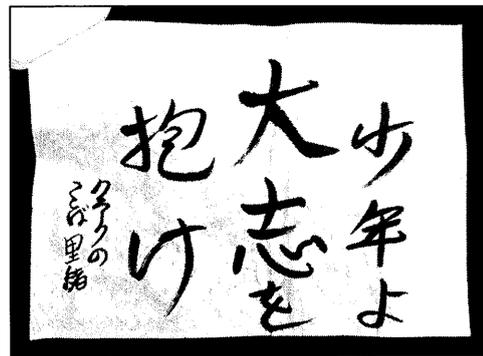


図 26-2

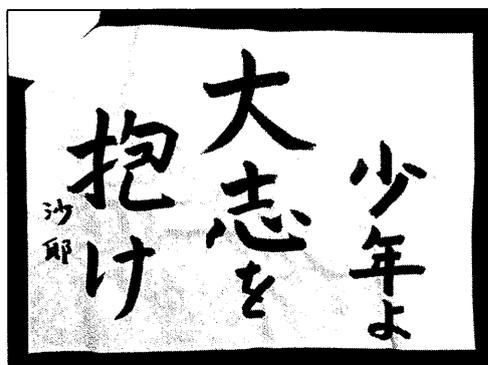


図 25-3

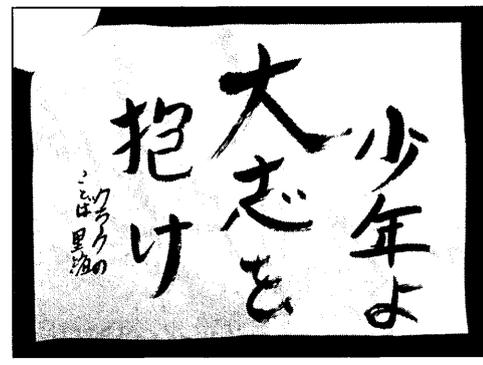


図 26-3

③の生徒ヲと生徒ワは、②の生徒よりも作品としての纏まりはあるが書き分けが出来ていない。全生徒のおよそ半数が、③に該当していた。“書き分ける”ことを学び易くするため今回のように短時間で3種類の書風で書く授業展開を行ったが、この結果と、授業中の生徒の反応から、生徒にとって3つのことを同じ時間内にすることは困難であるということがわかった。元々書道が得意であったり、書道が好きな生徒は楽しんで書作している様子で

あったが、書道に対して苦手意識のある生徒にとっては「3種類“も”書かなければならない」と苦痛であったようである。また、途中で飽きてしまう生徒が多いため、3種類課題があれば最後まで飽きずに書作することができるのではないかという希望もあったが、その効果があったのは少数の生徒のみであった。改善方法としては、1回の授業につき1つの書風を学習し、書き分けの授業を3回に分けるというものであるが、この場合漢字仮名交じりの書の単元の合計の授業時間数を大幅に増やすことになってしまい、実施校の現状としては難しい。また、3回の授業に分けることによってそれぞれの書風についてより深く学ぶことが可能であるが、“書き分け”の能力がつくかどうかはわからない。授業を実施する高校の生徒の実態によって判断する必要がある。今回の実施校では、前時で学習した内容がきちんと身につけているという生徒はごく僅かであり、何を学習したのか余り覚えていないという生徒が多い。そのため、3時間に分けて書風の学習を行っても、その後の授業で実際にそれぞれの書風で書き分けることができる生徒は少ないということが予想できる。また、今回の第2時限目では、様々な書風について深く学び身に付けることは目標としておらず、“書き分け”の能力を養うことを第一としている。以上のことを踏まえて、再度授業の改善策について熟考していかなければならない。

本時では作品提出の後10分程度の時間をとり、次回までに創作の題材を各自考えてくるように伝えた。また、題材についての決まりを黒板に板書し、忘れてしまうことが無いようにノートに書いておくように指示をした。題材についての決まりは以下の5点である。

- ① 漢字と仮名（ひらがな又はカタカナ）が最低でも一文字ずつは含まれている
- ② 文字数は5文字以上20文字以内
- ③ 詩集、ことわざ、漫画、歌詞など出典は自由とする（自作の言葉でも良い）
- ④ 題材は基本的に自由とするが、人を傷つける言葉や差別的な内容のものは避ける
- ⑤ 授業中の携帯電話を使用は禁止されているため、パソコンや携帯電話で調べた場合は必ずノートや紙にメモをしてくる

⑤については、メモ等を忘れて携帯電話を使用したいという生徒が出ることが大いに予想されるため、特に注意をするように促した。

#### 4) 第3時限 -創作活動1- (資料1-4)

3時限目からは半紙サイズの作品の創作活動に入る。創作活動では生徒によって進度が異なることが予想され、クラス全員が同じように作業を進めることは困難であるため、初めに創作の手順について説明し、その内容を黒板に板書をする。板書をした理由は、次の作業がわからなくなった生徒が黒板を見ることによって次の作業を把握し、指導者が何度も個別に説明する手間を省くためである。創作の手順は、以下の通りである。

- ① 題材を決定し、ワークシートに記入する
- ② なぜその題材を選んだのか、理由をワークシートに記入する
- ③ 作品をどのような雰囲気になりたいか考え、ワークシートに記入する
- ④ 字書を用いて集字する（漢字のみ）
- ⑤ 草稿を書く（構成・文字の大小・文字の配置など）
- ⑥ 草稿をもとに半紙で練習する
- ⑦ 清書をする

本時では、ワークシート（図27）をベースとして創作活動を行う。

<h2>漢字仮名交じりの書</h2>		組 番 氏名( )
<p>&lt;題材&gt;</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; text-align: center;">( ) の 詩・詞・言葉・句・うた</div> <p>1. なぜこの題材を選びましたか？</p> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; height: 40px; margin-left: 20px;"></div> <p>2. 作品をどのような雰囲気にしたいですか？</p> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; height: 40px; margin-left: 20px;"></div> <p>3. 工夫した点、苦労した点、良かったと思う点を書きましょう。</p> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; height: 40px; margin-left: 20px;"></div>	<p>&lt;草稿&gt;</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div>	

図 27

平均的な進度の生徒で創作の手順④、進度の早い生徒で手順⑤まで終わることを想定して実施を行うものとする。

手順①については、前時の授業終了前に「次回までに創作の題材を考えてくること」を指示したが、題材が見つからなかった、または考えてきていない生徒がいることを想定して、指導者がいくつか題材をピックアップしプリントにして準備しておく。その内容は偉人の名言やことわざ、俳句、漫画の台詞など、可能な限りバラエティに富んだものになるように心がけた。しかし、自分で言葉を選ぶ、または考えることも大切であり、最初からプリントを与えてしまうと生徒の考える力が育たないため、プリントの配付は創作活動開始から5分以上経過した後に希望者にだけ行うようにする。また、手順①について説明する際に落款の書き方にも触れておく。(例…詩→〇〇の詩、名言・台詞→〇〇の言葉、歌詞→〇〇の詞)

手順④については、1学期のうちわ創作の際に集字の方法、集字プリントの記入方法の両方を学んでいるため、全く覚えていない生徒が多い場合を除き説明は省略する。集字のポイントは、自身が表現したい雰囲気に近い字を選ぶこと、可能な限り漢字の書風は揃えること、集字プリントに記入する際に一本線で書くのではなく字典の通りに肉付けをすること、以上の3点としている。生徒が使用する字典は『五體字類<sup>12</sup>』であるが、字が載っていない場合のみ『角川書道字典<sup>13</sup>』を貸し出すこととする。今回の授業計画を組む際に、集字をさせるかどうかという点については非常に悩んだ。1学期のうちわ創作で、「集字の作業が面倒くさい」と嫌がった生徒が多く、もっと自由に書きたいと言っていた生徒も少なくなかったためである。うちわ創作の時と同様で創作活動に取り組む意欲が低下してしまうのではないか、古典の字を集字することによって“個性豊かな表現”が失われてしまうのではないかと考えた。しかし生徒の書作能力や学習意欲に関する現状を考えると、集字を全くせず書風は自由、題材も構成も全て自由とした場合、この創作活動が“遊び”のように捉えられてしまう恐れがある。漢字仮名交じりの書の学習を通して、書道＝堅いというイメージを持つ生徒の見方を変えるということを目指しているが、授業が遊びになってしまっただけでは意味がない。第1節第3章で述べたように、漢字仮名交じりの書の単元では「自由と親しみの中で書道について学び、少しでも興味を持って欲しい」と考えている。この考えと、生徒の現状を考慮して、今回の実践では文字を集字させることを決めた。また、集字を漢字のみとした理由は、授業時間数が限られていることと、すべての文字を集字させると必ず作業に飽きて嫌になる生徒がいると予想したからである。

手順⑤について、構成は書き手以外の人が“読める”ことを条件に基本的には自由とする。

<sup>12</sup> 『五體字類』／西東書房 第3版

<sup>13</sup> 『角川書道字典』／角川書店 第219版

しかし資料が何も無い状態では、生徒もアイデアが浮かびにくいのではないかと考え、本時用に制作した作品6点（図28～33）と、以前制作した折帖作品（図34）の計7点を掲示・展示することとする。作品はいずれも半紙サイズである。生徒は普段の授業で、表装された作品を実際に目にするということが無く、教科書に掲載されているものや手本、他クラスの生徒が制作した作品など、表装のされていないものしか見ることが出来ていない。そのため、表装された作品を見ることは生徒にとって良い刺激になり、書作に対するモチベーションを向上させることが出来るのではないかと考えた。特に図34のような折帖の作品は、授業外の日常生活でも目にする機会が滅多に無いため、より一層の効果が期待出来る。また、題材や構成、書風なども出来るだけバラエティーに富んだものになるように心がけ、生徒の表現の幅や考えが少しでも広がるようにと考えて書作した。

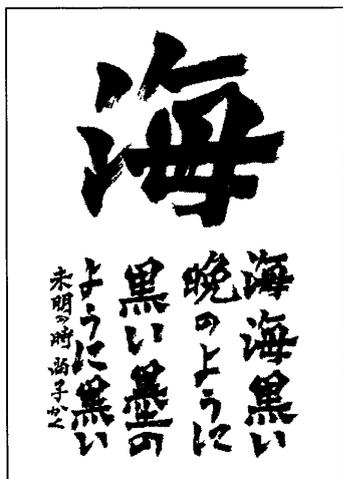


図 28



図 29



図 30

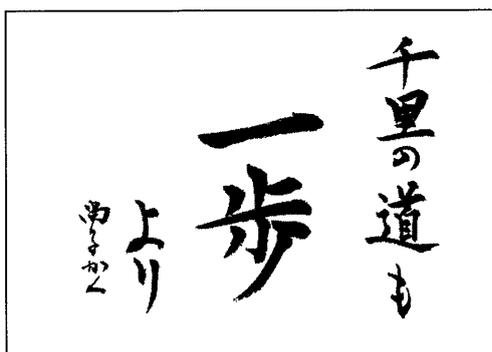


図 31

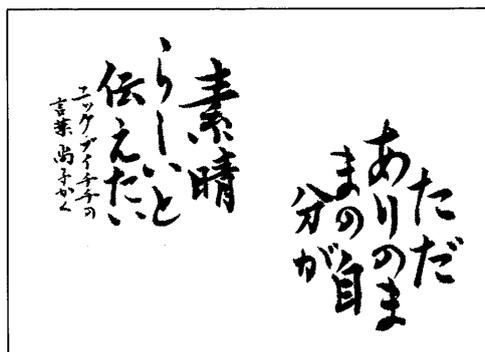


図 32



図 33

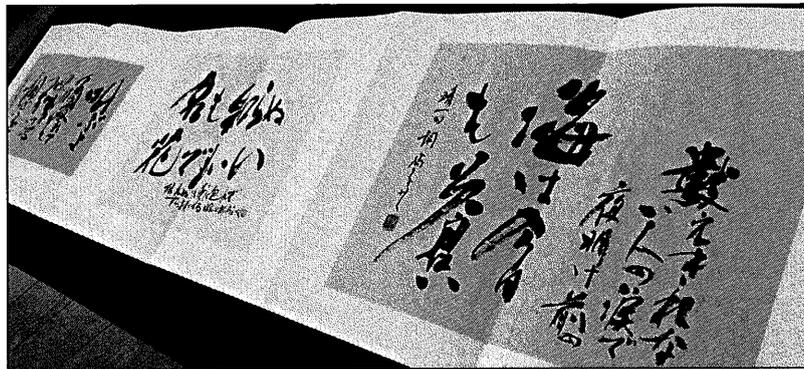


図 34

次に、授業の考察に移る。手順①の段階で、Aクラスは比較的どの生徒も題材を考えてきていて、手順④まですんなりと進めていた。全体的に進度が速く、本時終了の段階で過半数の生徒が手順⑤に取り組み始めており、全体の2割の生徒が手順⑤を終えている状態であった。BクラスとCクラスは半数以上の生徒が題材を考えてきていなかったため、題材のプリントを配付した。これにより、題材を探したが決めてくることが出来なかった生徒が「この中に漫画の台詞があるけど、映画とかドラマの台詞でも良い？」と聞いてきたり、「もっと真面目な言葉じゃないとあかんと思ってたから、プリント見せてみてよかった」と言っていたりと、題材のプリントが悩んでいた生徒の題材決定に有効的に働いたようであった。Cクラスは1時限目の考察で述べたように創作的な活動を好む生徒が多いことから、題材は考えてきていない生徒は多かったが、配付したプリントを活用して積極的に題材を選んでいた。そのため、本時終了の際には数名を除いてほとんどの生徒が手順④まで終えることが出来ていた。しかしBクラスでは、「題材は絶対に自分で考えたい」とプリントを受け取らない生徒がいたり、危惧していた通り「題材は選んだけど、忘れたから携帯で調べたい」と言う生徒がいるなどして、題材が全く決まらなかったため、本時終了まで一切作業が進まなか

った生徒が 10 名程度いた。B クラスは普段の授業でも私語や立ち歩きなどにより授業の進度が遅く、筆を用いた実技以外に対する学習意欲が低い生徒が多いため、今回のような題材決めは、前時終了時ではなくもっと以前から何回かに渡って声をかけておくべきであったと感じた。

手順④の集字では、作品をどのような雰囲気にしたいか明確な考えを持っていても、見慣れた書体である楷書、中でも九成宮禮泉銘や孔子廟堂碑などのベーシックなものを選ぶ生徒が多く、特に書道が苦手な生徒はこの傾向にあった。ワークシートに「流れるような雰囲気にした」「柔らかい雰囲気です」と書いていても、集字はカッチリとした楷書を選んでいて、その理由は「行書は難しそうだから」というものがほとんどであった。その場合は、楷書の中でも少し丸みを帯びたものを選ぶように提案するなどして、可能な限り生徒が表現したい雰囲気に近づくように指導を行った。しかし、集字をさせるということを決めた段階で、生徒の選択肢を広げるためにも様々な書風の古典を鑑賞させて、書風を選ぶ“頭”が柔軟になるように努めるべきであった。

続いて、手順⑤に進んだ生徒について。草稿を書く際、明確な構成を考えてきていなかった生徒は教室前方の黒板や机に掲示・展示した作品例を参考としていて、草稿の段階で悩んでいる生徒は比較的少ないと感じた。構成を考えてきていた生徒も作品例を見たことによって、自身の構成を見直す良い機会となったようである。また、創作活動に対して意欲的ではなかった生徒も、作品例を見て「この言葉の人知ってる!」「こんな風(折帖)にしているのカッコイイな」と興味を持ち、そこでやっと題材のプリントを受け取る、または自分で題材を考え始めるなどして、自ら創作活動に取り組み始めることが出来ていた。以上のことから、作品例の掲示は非常に有効であったと言える。

#### 5) 第 4 時限 -創作活動 2- (資料 1-5)

4 時限目は、引き続き創作活動を進めていく。前時同様、前方の黒板に創作の手順を板書し、構成を考える際の参考となるように作品例を掲示・展示しておく。次の時間が漢字仮名交じりの書の単元の最終であり、作品を仕上げなければならないため、すべての生徒が本時の間に手順⑥(草稿をもとにした練習)に入ることが望ましい。手順⑤の草稿を書き終えた生徒のワークシートを点検し、記入すべき項目や草稿の書き方、落款などの部分に不備があるもの、あまりに乱雑に書いているものがあれば指摘して訂正させる。ワークシートに問題の無い生徒にはそのまま草稿をもとに書作を開始するよう指示をするが、生徒によって書作に取り組み始める時間が異なるため、使用する半紙は枚数を決めず必要な分を自由に取りようにする。一度草稿通りに書作してみて、想像していたものと異なっていたり、他の構成が思い浮かんだ場合はそちらも試してみるように指示をする必要がある。一つの表現に

固執するのではなく様々な表現に取り組み、自身が表現したいものにより一層近づけることが大切である。一度書作をして見せに来た生徒には、作品をどのような雰囲気にしたいかなどの生徒の意向を確認してから指導を行わなければならない。その際、極力“添削”ではなく、「こういう表現があるよ」「文字の大きさを～にしてみたらどうかな」など、“提案”という形をとることが望ましい。こうするべきである、と指導する側の意見を押し付けるだけでは、生徒の“個性豊かな表現”の育成は望めない。

次に、授業の考察に移る。前時では、作品例を掲示したことは生徒が構成を考える上で非

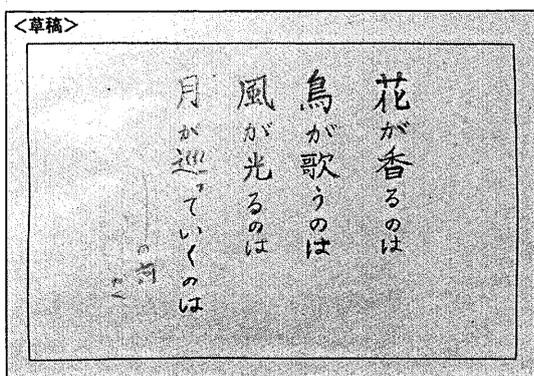


図 35

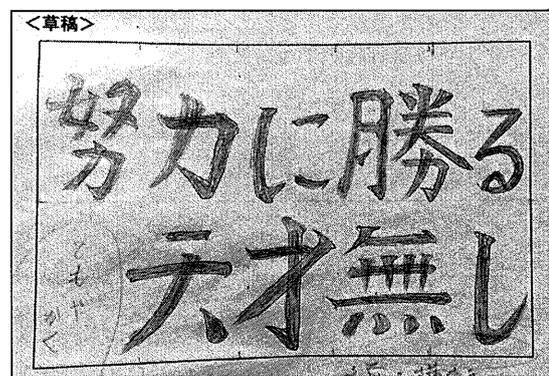


図 36

常に有効的であったと考察した。しかし、点検の際に実際に生徒のワークシートに書かれている草稿を見てみると、図 35 図 36 のような字配りや字の大小に変化の無い行書きの作品が多いと感じた。

このようなベーシックな行書きの作品が多くなった原因は、構成に関する説明が不十分であったことにあるのではないかと推察した。授業時間が限られているため、作品例の構成について一つ一つ説明の時間をとることは出来ず、自ら質問に来た生徒にのみ詳細な説明を行った。そのため、作品例のような構成に興味はあってもどのように書けば良いのか分からずに“難しそう”と感じてしまい、わざわざ聞きに行つてまでしたいとは思わない生徒が、結果として無難な行書きを選択したという可能性がある。勿論、生徒が望んで行書きを選択しているのであれば問題は無いが、“選択できなかった”という可能性がゼロでは無い以上、授業内での作品例の活用方法について一考する必要があると感じた。授業時間数を変えないことを前提として、作品例とその構成についての解説を載せたプリントを作成、配布するという方法を改善策として提案したい。この方法をとることによって生徒が、わざわざ質問をしなくても自分自身でその構成について理解することができ、行書き以外の構成にも積極的に挑戦することが出来るのではないだろうか。

6) 第5時限 -創作活動3- (資料1-6)

5時限目は作品の清書と、授業終了時に漢字仮名交じりの書に関するアンケート(資料2)を実施する。前時で提出した作品とワークシートをもとに書作した参考作品を、それぞれの生徒に配付する。参考作品は、漢字は基本的に生徒が集字したものを使用、構成も提出作品とワークシートの通りにし、生徒が作品をどのような雰囲気になりたいかということと落款の入れ方に重点を置いて書作している。参考作品は手本ではないため、必ずその通りに書かなければならないということはなく、あくまで一つの作例として捉えるように伝える必要がある。また前時と同様に、どのような作品にしたいかという生徒の意思を確認・尊重しつつ指導を行うように気をつける。

続いて、参考作品を渡したことによる作品の変化が顕著であった4名の生徒作品を取り上げて、第4時限と本時の清書作品の変化に焦点を当てて考察をしていきたい。ここでは前時の提出作品をa、清書作品をbとする。

(生徒カ)

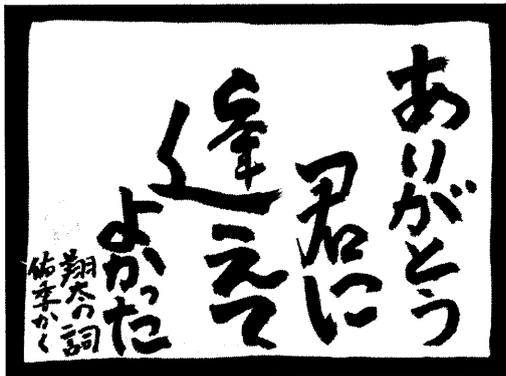


図 37 (a)

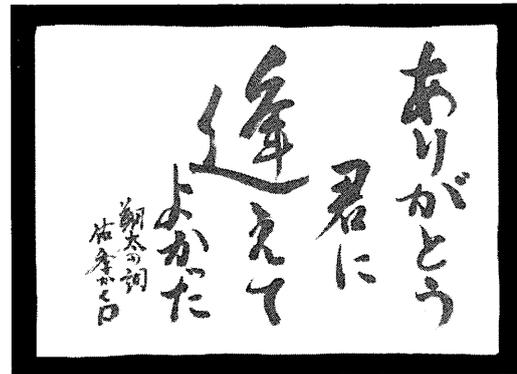


図 38 (参考作品)

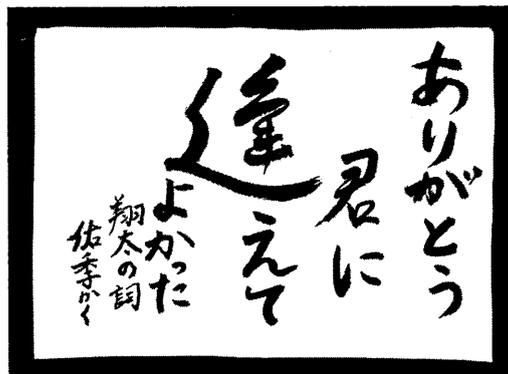


図 39 (b)

生徒カは『ありがとう君に逢えてよかった』という歌詞を「優しい雰囲気にした」と考え、漢字は行書体の物を集字している。作品 a (図 37) では全体的に力強く、ひらがなも楷書の雰囲気ですく書かれていたため、参考作品 (図 38) では漢字に柔らかさを出し、ひらがなも少し行書風を書くようにした。また、生徒カは普段から字が紙面に対して大きくなりがちであるため、あえて参考作品の字粒は小さくしている。作品 b (図 39) を見てみると、『逢』の偏と旁のバランスが気になるが、字は全体的に柔らかい雰囲気になっていて、落款が作品 a よりも収まりがいい。しかし、作品全体としては作品 a よりも寂しい雰囲気になっているように感じるため、参考作品のひらがなの線をもう少し太く書いていれば、より生徒の求める“優しい”雰囲気に近づけることが出来たのではないだろうか。

(生徒ヨ)

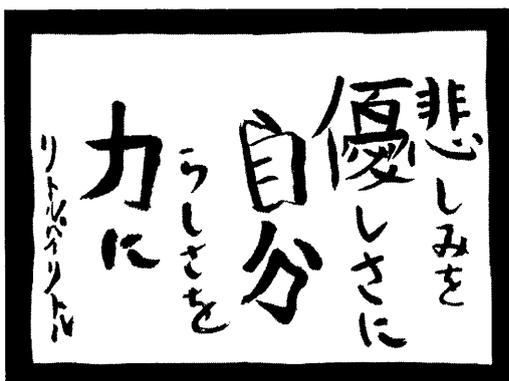


図 40 (a)

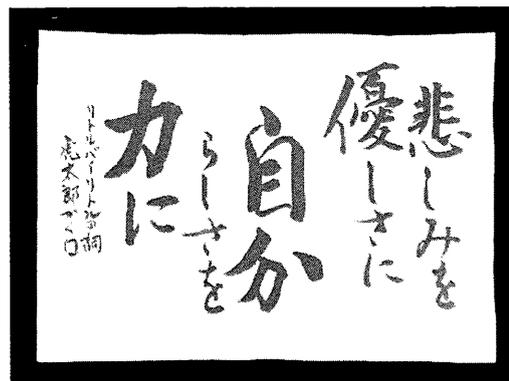


図 41 (参考作品)

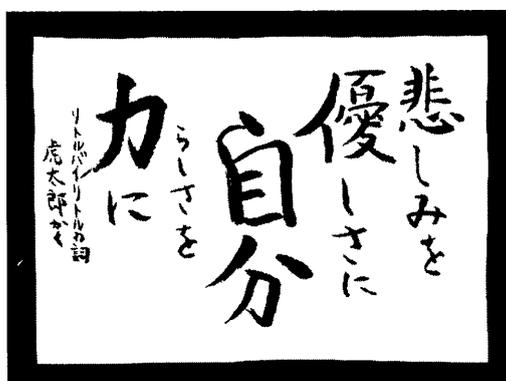


図 42 (b)

生徒ヨは『悲しみを優しさに自分らしさを力に』という歌詞を「漢字とひらがなの強弱をつけて書きたい」と考えており、また『自分らしさを力に』という部分を特に強調して書こうとしている。作品 a (図 40) の前半部分は漢字をひらがなよりも大きく書くことで、強弱の差を上手く表現することが出来ている。しかし、後半の『自分らしさを力に』の部分が前

半とほとんど変わらない大きさで書かれているため、参考作品（図 41）では『自分』と『力』を特に強調して書くようにした。その結果、作品 b（図 42）では漢字とひらがなの強弱をつけて、後半部分を強調して書くことができていることから、参考作品が生徒の書作に有効的

（生徒タ）



図 43 (a)



図 44 (参考作品)



図 45 (b)

に働いていると感じた。

生徒タは『笑顔のまんま』という歌詞を「あかるい雰囲気になりたい」と考えて書作している。このような構成で書いている生徒は他にはおらず、印象に残っている作品の 1 つである。作品 a（図 43）では漢字の集字をした際に字典では細部まで分からなかったのか、『顔』の頁（おおがい）の部分を書き間違えてしまっていたため、参考作品（図 44）では正しい

字に直している。また、漢字の位置と比べて『のまんま』の小書きの部分が外側に寄っていて、作品としてのまとまりを薄くしてしまっているように感じたことから、参考作品では少し内側に寄せてひらがなの字形も丸みを帯びたものになっている。しかし、作品b(図45)では『のまんま』の位置や『顔』の誤字が直ってまとまりが出たが、全体的に文字が小さくなり、作品aにあった自由奔放な雰囲気が失われているように感じる。字形や作品のまとまりという点では作品bの方が評価を高くつけることが出来るが、客観的に見て、生徒タが表現したいと考えていた“あかるい雰囲気”を持っているのは作品aの方ではないだろうか。参考作品や手本を渡すことによって作品が向上する場合もあるが、それと同時に、生徒の“個

(生徒レ)

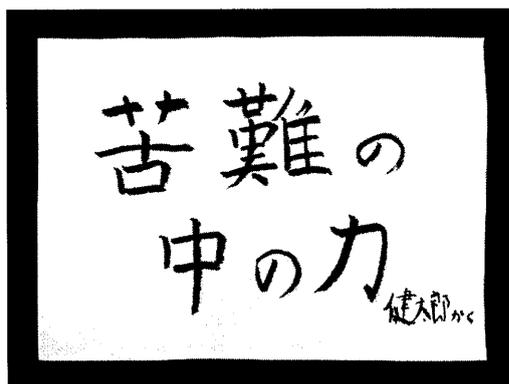


図 46 (a)

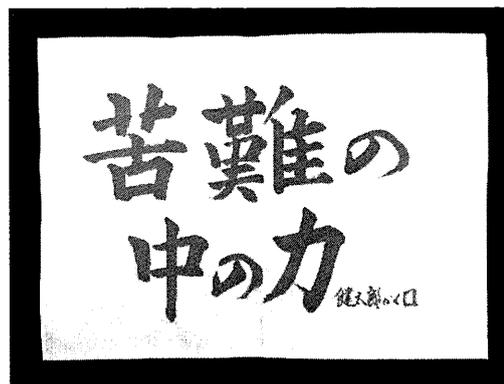


図 47 (参考作品)

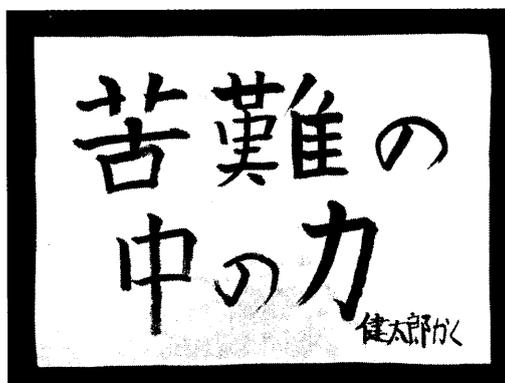


図 48 (b)

性”を奪ってしまう可能性があるということを感じさせられた。

生徒レは『苦難の中の力』という言葉に「内に秘めた力強さを表現したい」と考え、楷書で書作している。作品a(図46)は全体的に線が細く、漢字も集字したものより弱く間延びした雰囲気で書かれていたため、参考作品(図47)では作品aよりも線を太く、直線的に書き、“内に秘めた”力強さを表現するために線質が堅くなり過ぎないように心がけた。作

品 b (図 48) では作品 a と比べて『苦難』『力』の線が太く力強く書かれていて、作品全体が力強い雰囲気になっている。線の太細にバラつきがあるため、『難』の傍の部分や『の』の線をもう少し太くすることが出来れば、より自分の望む表現に近づけることができるのではないだろうか。

次に、紙面構成について分類分けをしながら生徒の作品をいくつか紹介していきたい。

<行書き>

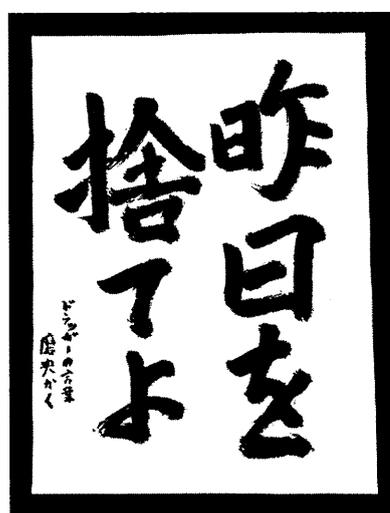


図 49

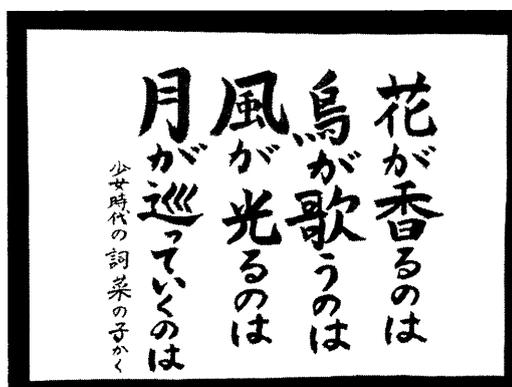


図 50

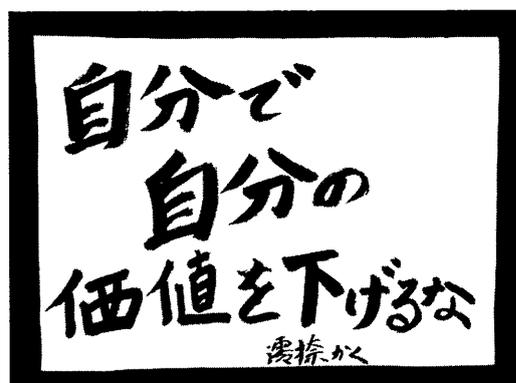


図 51

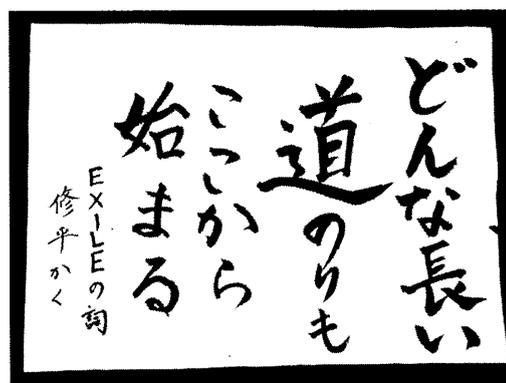


図 52

第 4 時限で取り上げたような“行書き”は全生徒中最も多かった構成である。字の大きさに変化をつけず、縦又は横書きで行書きをしている。このような構成で書いている作品は、文章が短く変化がつけ辛いもの、特に強調して書きたいという箇所がなく「文章全体を読んでも欲しい」と考えているもの、この 2 つのどちらかである場合が多い。少数ではあるが、「構成を考えるのが面倒臭い」と考えている場合（ワークシートの記述や授業中の言動などから推察）も、ベーシックな行書きの構成で書いているようである。

<行書き（意図的な余白）>

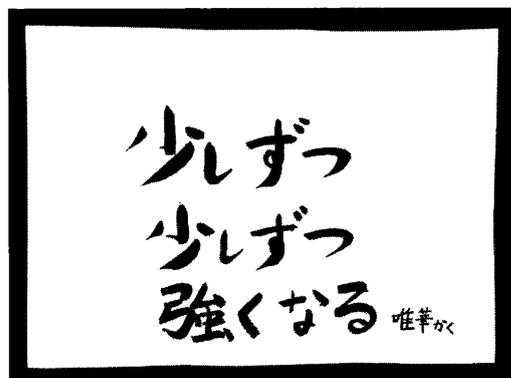


図 53

行書きの構成を選択した生徒の中で、意図して余白を作っている作品もあった。図 53 の作品は「つぶやくように、自分に言い聞かせるような雰囲気」で書こうとしている。上方と左右に大きく余白をとり、文字に変化をつけず淡々と書くことによって、つぶやいている様な雰囲気を出すことが出来ていると感じる。

<漢字や言葉（単語）を大きく書く>

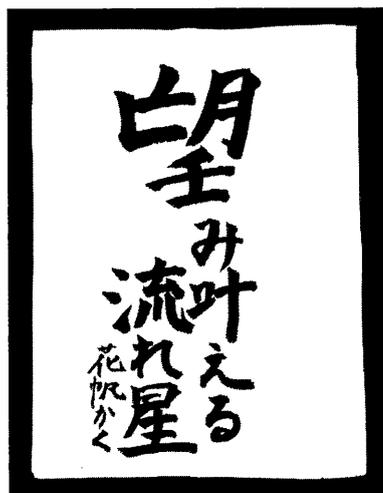


図 54

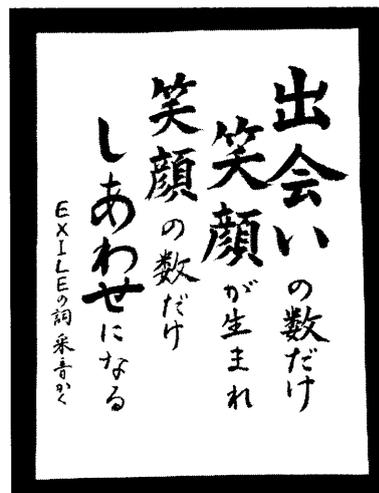


図 55

漢字や言葉（単語）のみを強調して書いている生徒は全体の 2 割ほどいた。図 54 の作品のように漢字 1 字を強調して書いている生徒は、黒板に掲示していた作品例（図 28）に影響を受けた可能性がある。また図 55 の作品のように、自分が好きな言葉、素敵だと感じる言葉を強調して書きたいと考えてこのような構成で書いているという場合もある。

<その他>

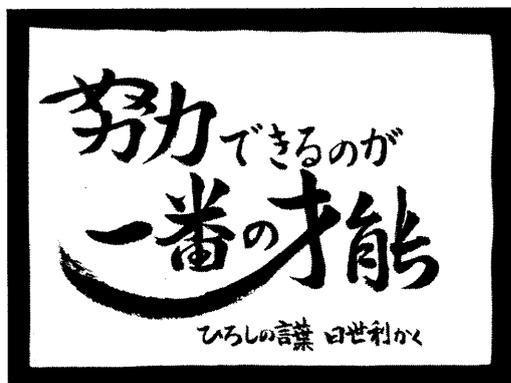


図 56



図 57



図 58

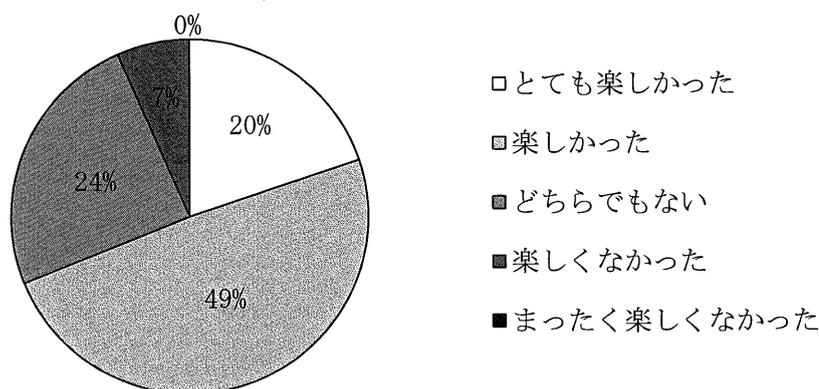
図 56～58 の作品は、他に同じ構成の生徒がいない作品である。図 56 の作品は、「努力する“才能”を伸ばしたい」と考えて『才』の最終画を極端に伸ばしている。図 57 の作品は「馬鹿っぽいけど実はきちんとしてる感じ」を表現したいと考えて、『馬鹿』の字を真っ直ぐに書かず敢えて位置をずらしつつ、字自体は行書体で真面目に書いている。この書き方によって作品は、どこか剽軽な雰囲気を出しつつも真面目さは失っていないと感じた。図 58 は特に指示や助言をしたということではなく、「笑いも福も丸のイメージがあるから」という考えから、自分自身で円形の構成で書くことを決めて実行している。

今回生徒一人一人の作品を見て、さらにワークシートに書かれた作品に対する考えや思いを知ることによって、同じような言葉でも生徒それぞれの考えや思い、感じ方があり、そこから生み出される表現は決して同じものにはならない“個性豊かな表現”というものを、改めて実感することが出来た。

## 7) アンケート集計結果

生徒が漢字仮名交じりの書の学習を終えてどのように感じているのか、書道に対してどのようなイメージを持っているのかということを知るために、第5時限の終わりに『漢字仮名交じりの書に関するアンケート』（資料2）を実施した。生徒が質問に正直に答えることが出来るように無記名で行っており、また、欠席などの関係によりアンケートの回答を行った人数は合計106名である。尚、アンケートの記述回答の部分については、生徒が書いた言葉を校正せずにそのまま明記している。

### <1. 漢字仮名交じりの書はどうでしたか？>



### <2. 1の回答について楽しかった理由、または楽しくなかった理由を聞かせてください>

#### 題材・表現が自由だから楽しかった

- ・自分で書きたい言葉を決めることができたこと
- ・好きな歌詞を書けたこと
- ・歌詞やったから、書くんたのしかった！
- ・自分の好きなことをかけるから、むずかしかったけど楽しかった

(その結果…)・上手く書けないと、頑張ろうと思えた

- ・自分で言葉を考えるから「自分の作品」って感じがして、嬉しくて楽しく書けた
- ・習字が楽しく感じた
- ・自分らしい書が作れて良かった

- ・好きなように表現できるから楽しかった
- ・雰囲気を自分で考えるのが楽しかった
- ・自分で漢字を、自分で調べて組み立てていくのが楽しかった

(その結果…)・文字の大きさ、書き方、置き方とかを考えて書くことができたので、  
自分の実力を知ることができてよかった

#### 題材を考える過程が楽しかった

- ・言葉を調べる時に、色々な名言があっっておもしろかった
- ・題材を考える時は楽しかった

#### 漢字だけじゃないから楽しかった

- ・今まで漢字ばかりだったのでなんか新鮮で楽しかった
- ・ひらがなが入っていたから楽しかった
- ・全て混ざってておもしろかった

#### 字が綺麗に書けたから楽しかった

- ・字をきれいに書こうと頑張ったので、書いてるときが楽しかった
- ・きれいに上手に書けた時、嬉しかったから
- ・字がキレイになっていくので、うれしい気持ちになる
- ・文字を書いていく内に、上手になっていくのがわかったから
- ・清書が上手くいったから楽しかった

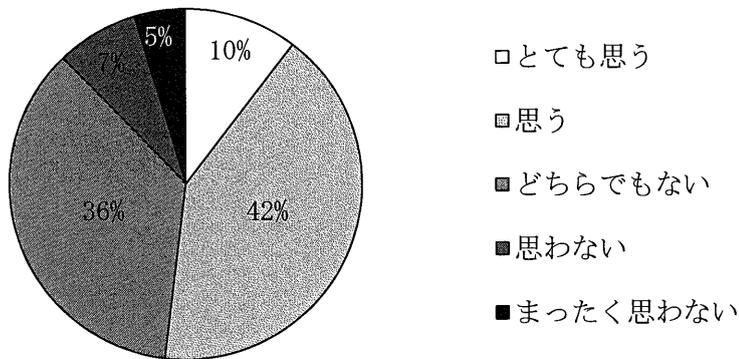
#### その他 (楽しかった)

- ・他 (漢字の学習) は昔の意味わからん人が書いたのを書くから面白くなかった
- ・字の正しい書き方や、字のバランスなどとても勉強になれて楽しかった
- ・書道が好きだから何をするのも楽しい
- ・全体的に分かりやすかったから
- ・むずかしかったけど、やりがいがあっって楽しかった
- ・先生がお手本を書いてくれてうれしかった！考えるのも楽しかった

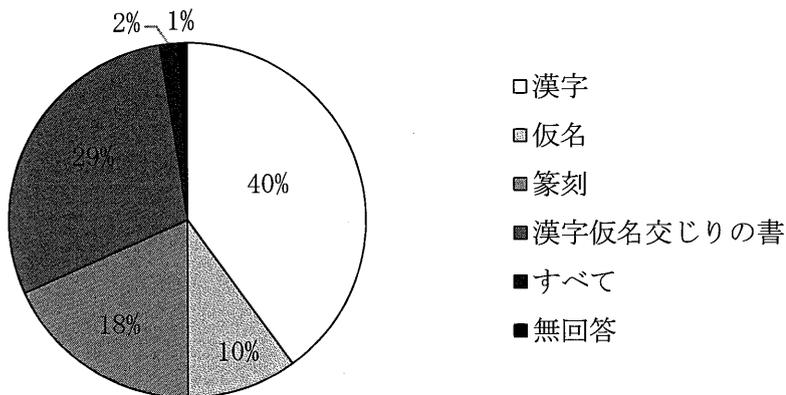
楽しくなかった

- ・漢字と仮名があったので、一文字一文字書くのが難しかった
- ・何回もやりなおすのが大変だった
- ・きれいに字が書けなかったのでおもしろくなかった
- ・漢字一つ一つに意識して書く部分があったので面倒だった  
→ (しかし…) 次はこういう点を逆におもしろいと思えたらいいなと思った
- ・ひらがなが苦手だったので、難しかった
- ・漢字とひらがなのバランスをとるのが嫌だった
- ・字を書くのが好きじゃないから
- ・面倒だった、難しかった

<3. また「漢字仮名交じり文」を書きたいと思いますか？>



<4. あなたは書道の中で、どの学習が好きですか？（複数回答可）>



<5. “書道”に対してどのようなイメージを持っていますか？>

予想を立てていた回答

- ・難しい かたくなるしい 厳しい 面倒くさい
- ・伝統的 日本の文化 和
- ・静かな空間 寡黙
- ・美しい きっちりとしている
- ・字が綺麗になる, 上手くなる
- ・上手い人はかっこいい
- ・実力主義 結局, 上手な人が良い成績をもらう
- ・見本そっくり書けたり, 綺麗に書けると嬉しい
- ・芸術的 美しい
- ・集中して書く 心身を無にする 心をしずめる 精神を整える
- ・字の歴史を学んで, 文字を書く

予想を立ててなかった回答

- ・様々な個性が出て, そこが面白い
- ・誰でも書けるが, 字の形などで個性が出る
- ・自分(考え, 感情, 気持ち)を文字で表現する, (書道は)それに適した方法
- ・人の心に強い“印象”を残すことができる
- ・たくさんの漢字や文字を書き, 自分だけの作品を作れる
- ・男気がある
- ・ただ字を書くだけだと思っていたが, 字の意味を知っているかどうかや, 書き方によって雰囲気が変わる
- ・気持ちを込めやすいもの
- ・心の綺麗さが字に表れる 書く人の性格があらわれるもの
- ・楽しい
- ・難しいが, 書くごとに上手くなるイメージ

## 第2節 “自由” がもたらす効果について

### 1) 授業考察とアンケート結果から分かること

アンケートの集計結果から、漢字仮名交じりの書の学習を終えて「とても楽しかった」「楽しかった」と回答している生徒は全体の約70%であった。この結果は第3時限からの創作活動において、題材や表現が自由であったことが大きく関係している。漢字や仮名の学習の場合、臨書が主な活動であり書く内容も表現の仕方も決められていて、書かれている、または刻されている通りに書かなければならない。臨書活動の後に創作を行うという場合でも、漢字の学習では熟語や漢文、仮名の学習では和歌や俳句が題材であり、ほとんどの高校生にとって馴染みの深いものではない。果たして、書道の授業において生徒が“自由”を感じる機会はあるのだろうか。また、扱っている題材も馴染みの深いものではないことから、生徒の実態にも拠るが、もともと書道が好きな生徒以外の生徒に“書きたい”と思わせることは困難であると考え。尚、生徒への接し方によって状況は変化するが、指導者や生徒の実態によって接し方が様々であるため、ここでは考慮しないものとする。高校生にとって馴染みのある現代語で表記された詩や歌詞、偉人の言葉などを題材として扱うことが出来る漢字仮名交じりの書は、高校書道の単元の中で、生徒の書作能力に関わらず“楽しい”と感じさせる可能性を最も秘めている単元であると私は考えている。そして題材を選択する自由、表現の方法を選択する自由、個々の表現があり自身の感じるままに表現することが出来る自由、書道の中に多くの“自由”を感じる事が出来る単元でもある。授業中の生徒の反応とアンケートの回答から、今回の実践では、多くの生徒が自由を感じ、書作能力の高低に関係なく“書く”ということを楽しむことが出来ていたように感じる。

次に、題材や表現を自由にすることで、生徒が楽しんで取り組むことができるということの他に、もう一つ大きな効果があるということが分かった。題材が自由であると、好きな詩や歌詞、言葉であるからこそ思い入れが強く「もっと上手に書きたい」「もっと良い作品にしたい」と、自然と生徒の中に向上心が芽生えるというものである。このことは、アンケートの記述回答の欄で書かれていた「上手く書けないと頑張ろうと思えた」という言葉を読んだことにより気がつくことが出来た。この言葉を読んだ際、実際に創作作品で好きな歌手の歌詞を選んで書いていた生徒のことを思い出した。自分の思った通りに書けず悩んでいる時、「大好きな歌だから、こんな下手なままで終わりたくない。カッコいい歌だからもっとカッコいい作品にしたい」と言って何度も書き直していた。他にも「好きな漫画のキャラクターの台詞だから」「憧れている選手の言葉だから、手は抜きたくない」「聴くと笑顔になれる歌だから、(その歌詞を書いている)この作品もそういうものにしたい」など、同じような考えを持って書作している生徒が多く見られた。与えられた課題や言葉は、自分が共感しない限りは漠然としたイメージしか持つことが出来ず、適当なところで諦めることが可能

である。しかし自分で選んだ言葉や歌詞には、好きであるがゆえに自分の中での明確なイメージや理想があり、そのような題材を選んだ生徒達はそこに到達するまで諦めることが出来ない。その結果として、生徒の書作に対する向上心が芽生えたのである。また、今回のように既存の言葉を選ぶのではなく、自分で“考える”“作る”という方法を取り入れた場合はどうであろうか。自分の中から生まれた言葉には、より一層の愛着が湧き思い入れが強くなるのではないだろうかということ考えた。加えて、言葉を“考える”ことにより国語力の上昇も期待することができる。これも改善案の一つとしてあげておきたい。しかし、最終的に作品を自分の思った通りに上手く書くことができなかつた場合、思い入れが強い分普段の書作時よりも自身の書作能力に対する落胆が大きく、結果として記述回答にある「きれいに字が書けなかつたからおもしろくなかつた」という考えになってしまっていたことは、非常に残念であった。アンケートの質問1で約70%の生徒が漢字仮名交じりの書を「とても楽しかつた」「楽しかつた」と答えているにも関わらず、また書きたいと思いませんか？という質問3に対して「どちらでもない」「思わない」と答えた生徒の割合が増えていたのは、これが原因ではないかと推察することが出来る。これは漢字仮名交じりの書の学習に限つたことではないが、「今回は上手く書けなかつたから、次の時はもっと頑張ろう」という風に、“出来なかつたことを次回の目標にする”ということ、生徒が考えることの出来る環境づくりについて一考する必要があると感じた。今後の課題として取り組んでいきたい。

## 2) より発展的な指導の提案

次に、今回実施した授業を踏まえて、より発展的な指導について提案をしたい。授業時間の総数は6時間で、2年時に今回の実践の授業を受けた生徒に対して、3年時に実施をするという想定で指導計画を組んでいる。今回の実践(資料1)を1年時に実施した場合は、2年時に以下に述べる発展的な指導を実施することが望ましい。

### <第1時限 -多様な表現について-> (資料3-1)

第1時では、2年時に学習した漢字仮名交じりの書について振り返りを行い、2年時では触れていなかつた著作権について説明を行う。2年時の創作活動では歌詞を書いている生徒が多かつたため、歌詞の利用やSNSへの投稿などについて触れておく。その後、名筆鑑賞を行う。鑑賞させる名筆は、出来る限り表現方法(墨の濃さや書風、構成など)の異なるものを2点以上準備する。教科書に掲載されているものだけでなく、指導者自身が「面白い」「紹介したい」と感じた作品を用いることで、より深い説明をすることが可能である。また生徒の状態によっては、名筆の鑑賞では興味関心をもつことが出来ない場合がある。その場合、2年時と同様に(図4~6)生徒が興味を持つことが出来るような題材を用いて指導

者が作品を制作する必要がある。名筆を鑑賞させて「どのように感じるか」「どのような雰囲気だと思うか」などの発問を行い、ワークシート等を用いて記入させる。続いて、なぜそのように感じたのか、2つの作品はどこが異なるのか、という疑問を掲げた上で多様な表現の説明に移る。授業者が書作した、同じ言葉を異なる表現で書作した作品を数種類順々に黒板に掲示していき、発問を交えながら各々の表現方法にどのような効果があるかということの説明をする。発問の例は「墨を薄くしてみると、ベースの作品と比べてどんな雰囲気に変わったかな?」「渴筆が多いと、どんな風を感じるかな?逆に墨がたっぷり入っているとどういう違いがあるかな?」などである。そしてその後、残りの時間で実際に表現方法を試させる。淡墨は墨の扱い方が難しいが、まずは一度触れさせてみるのが大切である。楽しい、悲しい、寂しい、力強い、優しいなど、自分でテーマを考えて表現方法を試してみるように指示する。

#### <第2時限 -それぞれの表現・相互鑑賞-> (資料3-2)

第2時では前時の復習も兼ねて、前時のワークシートを見ながら再度様々な表現方法を試させる。10分程度で切り上げて、生徒を5人前後のグループに分けて指導者または生徒が提示したお題に沿って書作をさせる。この時、お題は漢字→平仮名→漢字仮名交じり文と段階を分けるようにする必要がある。まずは漢字・平仮名のみの短い言葉のお題で書作し、“表現する”という行為に慣れさせてから漢字仮名交じり文に入る、という指導をする。お題の例としては、以下のようなものがある。

漢字 …犬, 雨, 風, 夏    平仮名 …ねこ, さくら, ふゆ

漢字仮名交じり …雨が降っている, ねこが鳴く

今回実践を行った授業(資料1)では相互鑑賞の時間がなかったため、お題ごとにグループ内で相互鑑賞を行い、同じお題でも個々によって表現が異なることを理解させる。2年時に漢字仮名交じりの書の基礎を中心として学び、3年時により多様な表現を学び自身の表現の幅を広げて、自身とは異なる他者の表現も理解出来るようになることが望ましい。またこの展開では、指導者側は生徒が“表現する楽しさ”を味わうことが出来るような雰囲気作りを心がける。そのために、生徒一人一人の表現を“尊重”“評価”する必要がある。

#### <第3時限 -自分の中のイメージを書で表現する-> (資料3-3)

第3時では、書道の授業の中に音楽を取り入れたいと考えた。使用する曲は中島みゆきの『糸』という曲で、この曲を選択した理由は2つある。1つは聴き取りやすさで、ゆっくりとした曲調のため歌詞が非常に聴き取りやすい。もう1つは、選択した私自身が非常にこの曲が好きであり、生徒にもこの曲の存在を知ってもらいたいという思いからである。曲を聴

いている最中に書きたいと思う箇所があれば、配布する歌詞のプリントにその都度チェックを入れるように指示する。ここで、集中して曲を聴かせるために、聴いている間は周囲と雑談をしないように厳しく注意を促す。どれだけ生徒を曲に集中させることが出来るかによって、本時の授業が成り立つかが決まる。

曲を流し終えたら、歌詞の中から書きたい箇所を選択し、曲を聴いて感じたことや自身の気持ちを元に、作品の雰囲気を決めさせる。

例) あたたかい 力強い 悲しい、寂しい …など

書作する作品のサイズは半紙で、縦と横は自由、書く歌詞の長さに制限は設けないものとする。ただし全文、漢字1文字、平仮名1文字は避けさせる。ここで、書きたい箇所が複数ある場合は、無理に一つに絞らせる必要はない、複数の素材を用いて表現を試みることで、“個性豊かな表現”の多様化が期待できる。しかし、最終的に提出する作品は一つだけであるということを伝えておく必要がある。続いて書作に移る。イメージ通りにいかず悩んでいる生徒には、墨の濃淡や潤濁、筆運びや構成、字形など様々な面からアドバイスを行う。この時、あくまで“アドバイス・助言”に留めることが重要で、「このように書きましょう」という指導は、生徒の自己表現の幅を狭めてしまう恐れがあるので注意する。

続く第4時限からは、今回の実践と同様に自由課題での創作活動(資料1-4, 5, 6)を行う。多様な表現について学び、相互鑑賞も実施していることから、2年時よりも表現の幅が広がり、より一層個々の表現で書作された作品になることが期待できる。

### 第3章 書道教育における漢字仮名交じりの書の重要性

高等学校における授業の実践、そして実践の考察を経て、漢字仮名交じりの書がこれからの書道教育において非常に重要な存在となるのではないかということに改めて実感した。近年ますます機器の発展や情報化が進み、書道に携わることのない人が学校の授業以外で筆を手取る機会はほとんど無い。それどころか、近頃は大学の講義でノートをとる際にパソコンを用いている学生も珍しくないという状況になっていたり、大学だけでなく高等学校や中学校、小学校でも黒板に書くのではなくプロジェクターを使用して授業を行うという学校が増えてきていたり、“書く”という行為そのものから離れつつあるのである。生活する上で必要不可欠であった“書く”という行為のハードルが、だんだんと上がってきてしまっているように感じる。“書き離れ”が進む現代で、“書く”という行為を主としてる書

道はどのような立場にいるのであろうか。特に他者とのやりとりがメールやLINEが中心となっている高校生にとって、“書かなければならない”書道の授業は面倒臭いと感じる存在であるかもしれない。そのため、ただ漢文を書く、ただ和歌を書く、という授業が中心では高校生に興味を持たせることは非常に難しい。そこで、漢字仮名交じりの書の学習において書道の“自由”に触れ、馴染みのある題材であることから書ける書けないに関わらず“楽しい”と感じ、自身で題材を選択することにより題材への愛着や思い入れが生まれ、そこから自然と書作に対する向上心が芽生える。漢字仮名交じりの書の学習は書道教育において、“書く”ことのハードルを下げ、書道に楽しさを見出すことができる重要な役割を担っているのではないだろうか。中学校での書写を経て、書くことが苦手な生徒は“堅い”“言われた通りに書かなければならず、自由がない”というイメージを持ったまま高校書道に臨んでしまう恐れがある。そのような生徒の“書く”ことに対する苦手意識を無くし、書道＝自由がない、堅いというイメージを払拭するためにも、漢字仮名交じりの書の単元を書道Ⅰの教科書の先頭を持つてくるということを提案したい。これは漢字の書の学習で、初めから苦手だという意識で取り組むよりも、一度漢字仮名交じりの書を学習して“書く”ことへの抵抗感が薄れた状態で漢字や仮名の学習に取り組む方が、より質の高い学習になるのではないかという考えからである。

## おわりに

今回実践を行ったのは2年生であるが、1年時にほとんど漢字仮名交じりの書について学んでいなかったため、漢字仮名交じりの書については“無”の状態であったと言える。1年生から2年生の1学期にかけて漢字の書を中心に学習してきている生徒にとって、今回漢字仮名交じりの書に触れ、多少なりとも書道の学びの中で“自由”に触れたことが良い方向に作用していくのではないだろうか。今後の書道に対する見方や意識、取り組み方に少しでも変化が現れることを望みたい。

また、これは漢字仮名交じりの書の単元に限らず書道の授業全体に関わる問題であるが、近頃高校で授業を行っていて「書道の授業はやはり少人数制で行うことが望ましい」ということを実感している。少人数の方が指導がしやすいという理由もあるが、最も大きな理由は、生徒にとって良い効果があるということである。少人数であれば生徒も授業に集中しやすく、また40人クラスなどの時よりも多く指導を受けることができ、その分技能面での上達が期待できる。その結果、書道への苦手意識がある生徒はその意識を薄れさせることができ、「もっと上手に書きたい」という意欲が生まれ、生徒自身の成長へと繋がるのではないだろうか。これは今回実践を行った大阪府立長尾高等学校において放課後に授業の補習を

行った際、普段の授業では全く集中せず終始周囲と雑談をしていて授業の終わりに1枚か2枚だけ書いて提出していた生徒数名が、少人数の補習では繰り返し指導を行っていたところ、徐々に集中して取り組み始め、自ら進んで「どこを直したらいい？」と聞くなど普段よりも格段に意欲的になっていたことから感じたことである。学校によって実施時間や人数は異なるが、生徒にとっても指導する側にとっても、今回提示した少人数制の授業などのように、より良い学習の効果を得ることができる授業形態になってゆくことを期待したい。

最後に、本論を執筆するにあたって必要不可欠であった授業実践の実施や、アンケートに協力をしていただいた大阪府立長尾高等学校の書道 II 選択者に感謝の意を表し、結びの言葉とする。

## 芸術科書道 II 学習指導案

指導者 齋藤尚子

1. 日 時 平成 27 年 10 月 28 日～12 月 18 日
2. 場 所 大阪府立長尾高等学校 書道実習室
3. 対象学年 第 2 学年 書道選択者 114 名 (3 クラス展開)
4. 単 元 名 「漢字仮名交じりの書」
5. 単元の目標
  - ・漢字仮名交じりの書における表現の違いやその効果を理解し、自身の表現の能力を養う。
  - ・自分の考えや思いを、書を通して表現することが出来る (自己表現力)。

### 6. 単元の設定理由

漢字仮名交じりの書は、書写能力よりも自己表現・創造性を重視した単元である。漢字の学習などを経て、書道は「整った美しい字を書かなければならない」と思っている生徒の“意識”や“書道への見方”を変える良い機会となるように本単元を設定した。自由に読み書きでき、身近で親しみやすい題材であるところから、生活に即して書表現を楽しむことが期待できる。また、漢字と仮名の調和を図りながら、漢字仮名交じり文という日常的なものを素材にして自分自身の考えや思いを素直に表現することで、生徒の性情が表され、“個の表現”へとつながる指導が可能であると考えている。

### 7. 単元の評価規準

書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能	鑑賞の能力
【関】 漢字仮名交じりの書の創造的活動の喜びを味わい、書の伝統と文化に関心をもって、主体的に表現や鑑賞の創造的活動に取り組もうとする。	【工】 漢字仮名交じりの書の良さや、美しさを感じ取り、感性を働かせながら、自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫している。	【創】 創造的な書表現をするために、漢字仮名交じりの書の基礎的な能力を生かし、効果的な表現の技能を身に付け表そうとしている。	【鑑】 日常生活の書の効用、文字及び書の伝統と文化について幅広く理解し、書の良さや美しさを創造的に味わっている。

### 8. 評価の手立て (A から C の 3 段階評価)

	A	C
【関】	・進んで発言するなど授業に意欲的で、積極的に漢字仮名交じりの書の表現技法を理解し習得しようとしている。	・漢字仮名交じりの書に関心をもたず、授業に消極的である。 → 指名して発言させるなどして、関心をもつことが出来るよう工夫する。

【工】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫することが出来ている。</li> <li>・ 漢字仮名交じりの書における基礎的な能力が身に付いている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自らの意図に基づく構想が出来ず、表現の工夫を試みていない。</li> <li>→ 指導者自身の作品を例として鑑賞させ、自らの意図に基づいて構想する方法をよりわかりやすくし、取り組みやすいように指導する。</li> </ul>
【創】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 漢字仮名交じりの書における基礎的な能力を身に付けた上で、より効果的な書表現を用いて発展的な創作活動を行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基礎的な能力が身に付いておらず、創造的活動に取り組むことが出来ていない。</li> <li>→ 筆を持ち一緒に書く、生徒の筆で実際に書いて見せるなどして表現方法をよりわかりやすくし、基礎的な能力を身に付けさせる。</li> </ul>
【鑑】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 相互鑑賞に意欲的に取り組み「個の表現」の多様さを理解、その良さを味わった上で、自身の創作活動に生かしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 鑑賞活動に消極的で、「個の表現」の多様さや良さを理解しようとしていない。</li> <li>→ 相互鑑賞の作品における表現にどのような効果があるかを説明し、同じ素材でも表現方法によって与える印象が異なることを理解させ、関心をもたせる。</li> </ul>

## 9. 単元の指導と評価の計画（全5時間）

	学習内容	評価規準【観点】
第1時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 漢字仮名交じりの書について</li> <li>・ 書風の違い、効果について</li> <li>・ 『風が吹いている』楷書、自由の二種類書作する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 漢字仮名交じりの書、書風の違いとその効果について学び、関心をもっている。【関】</li> <li>・ 『風が吹いている』の自由書作において、自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫しようとしている。【工】</li> </ul>
第2時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 『少年よ大志を抱け』楷書、行書、北魏風の三種類を書作する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 題材に関心をもち、主体的に取り組んでいる。【関】</li> <li>・ 三種類の書風において、“書き分ける”ことを意識して書作している。【関】</li> </ul>
第3時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 創作課題①</li> <li>題材決め → ワークシート記入</li> <li>→ 集字 → 草稿作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 創作活動に主体的に取り組んでいる。【関】</li> <li>・ 自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫しようとしている。【工】</li> </ul>

第4時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 創作課題②</li> </ul> 前時の続き → 草稿をもとに書作	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 創作活動に主体的に取り組んでいる。【関】</li> <li>・ 自らの意図に基づいて構想し, 表現を工夫しようとしている。【工】</li> </ul>
第5時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 創作課題③まとめ</li> <li>・ アンケートの記入</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 創作活動に主体的に取り組んでいる。【関】</li> <li>・ 自らの意図に基づいて構想し, 表現を工夫しようとしている。【工】</li> <li>・ 第1時, 第2時で学習・習得した漢字仮名交じりの書における基礎的な能力を生かし, 効果的な表現を試みている。【創】</li> </ul>

## 【本時の目標】

- ・ 漢字仮名交じりの書について学び、理解する。
- ・ 表現が異なることによって与える印象が変わることを理解する。
- ・ 自分がイメージする“風”を表現する。

	○指導内容	◇指導内容 ・ 指導上の留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 挨拶</li> <li>・ 準備</li> <li>・ 本時の説明を聞き、何について学ぶのかを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 挨拶，出欠確認を行う。</li> <li>・ 本時で学習する単元について説明する。</li> </ul>
展開 35分	<p>○漢字仮名交じりの書とその特徴について学び、理解する (5～10分)</p> <p>○作品例①②③を見て、それぞれの書風の違いを発見し、その効果を理解する (5～10分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 板書された内容のノートをとるように指示。</li> </ul> <p>◇漢字仮名交じりの書と、その特徴について説明する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 漢字と仮名（ひらがな、カタカナ）が交ざった文章や言葉を書いたものであり、近年ではローマ字や数字が含まれているものも多い。</li> <li>例) 詩，歌詞，短歌，俳句，言葉</li> </ul> <p><b>特徴</b> 同じ言葉・文章でも、 表現方法によって与える印象が変わる</p> <p>※表現方法…書風だけでなく、字形や空間の取り方、墨の濃さ、全体成なども含まれる。</p> <p>◇「海賊王に俺はなる」という言葉を模造紙に書いたものを三種類黒板に掲示する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①楷書で書いたもの（ベースになる）</li> <li>②行書で、①よりも線を細く書いたもの</li> <li>③北魏の楷書を意識して書いたもの</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 最初にベースとなる作品①を掲示し、書かれている言葉で作品に注意をひきつける。</li> </ul>

	<p>○「風が吹いている」を二種類書作する (20 分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次に作品②を掲示し、どのような印象を受けるか質問する。その後、①との表現方法の違い (書風・線の太細・運筆の速度) を列挙し、その効果を説明する。</li> <li>・最後に作品③を掲示し、②と同様の質問、説明を行う。</li> <li>・②と③の印象を質問する際、一人だけでなく三人以上の生徒に質問を行い、様々な意見が出るのが望ましい。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・半紙を 6 枚配布する</li> </ul> <p>◇「風が吹いている」を二種類書作させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>a 楷書で行書きしたベーシックなもの (模造紙に書作したものを黒板に掲示)</li> <li>b 書風, 構成, 紙の縦横など文章以外自由</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・a は黒板に掲示した手本通りに書くように指示する。</li> <li>・b は書風や構成, 字粒, 半紙の縦横等, 文章以外すべてを自由とし, 特に決まりは設けないものとする。</li> <li>・b は「風が吹いている」という文章から, 自身が頭に思い浮かべる“風”をそのまま表現するように指示する。</li> <li>・下記は一例であり, 生徒の感性を尊重するように心がけ, 指導者側の意見を押し付けないように注意する。</li> </ul> <p>例) そよ風 → ・行書風で流れるように                      ・線を細くゆらゆらと揺らす</p> <p>強 風 → ・楷書で力強く, 線を太く                      ・線の太細はあまり変えず, 起筆や収筆の際に鋒先をきかせ                      ピリッとした雰囲気</p>
--	----------------------------------	---

		<p>嵐 → ・紙面からはみ出す程大きく ・渴筆を多くする</p> <p>&lt;机間巡視&gt;</p> <p>・風に対するイメージは固まっているがどのように表現すればよいか悩んでいる生徒には、アドバイスの範囲に留めつつ表現方法について助言をする。</p> <p>○「こういう表現の仕方もあるよ」 「～という風を書いてみてもいいかもしれないね」</p> <p>×「こういう表現をしましょう」 「～という風を書こう、書きましょう」</p>
<p>まとめ 10分</p>	<p>○作品提出</p> <p>・提出する際、作品の裏に鉛筆またはシャーペンで名前、組、番号を記入する。</p> <p>・片付け</p> <p>・挨拶</p>	<p>◇作品を提出させる</p> <p>・提出する作品を ab から一枚ずつ選ばせて、裏に鉛筆またはシャーペンで組、番号、名前を記入し、提出させる。</p> <p>・b の作品には、自身がどのような風をイメージしたのかということも記入するように指示。</p> <p>・作品選びに困っている生徒の補助をする。</p> <p>・次々回の授業で創作を行うため、各自題材を考えておくように伝える。</p> <p>・挨拶</p>

## 【本時の目標】

- ・前時で学習した表現方法の違いとその効果について、実践を通して理解を深める。
- ・三種類の書風に挑戦し、“書き分ける”ことを学ぶ。

	○学習内容	◇指導内容 ・指導上の留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> <li>・準備</li> <li>・前時の学習内容を振り返り、本時の学習内容について理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶、出欠確認を行う。</li> <li>・本時の学習内容について説明する。</li> </ul>
展開 30分	<p>○三種類の手本についての説明を聞いて特徴を理解し、書作する際のポイントを学ぶ (5～10分)</p> <p>◇①②③の三種類を書作する (20～25分)</p>	<p>○本時で書作する三種類の手本を配布し、それぞれの作品について説明する</p> <p>『少年よ大志を抱け』</p> <p>①楷書（ベースとなるもの）</p> <p>②行書（少し連綿を入れる）</p> <p>③北魏風（線を太く、力強く）</p> <p>・前時の「海賊王に俺はなる」で学習した、三種類の表現方法とその効果について振り返る。</p> <p>・①…ベースとなる作品なので、起筆や収筆、止め払いなど細部まで意識して書くように指示する。</p> <p>②…①よりも次の字への流れを意識し、連綿などにも注意して書くように指示する。</p> <p>③…①②よりも線を太く、力強く書き、起筆と収筆の筆遣いにも注目して書くように指示する。</p> <p>・半紙を9枚配布する。</p> <p>◇①②③の三種類を書作させる</p> <p>・半紙を、どの作品に何枚使用するかは自由とする。例) ①に二枚, ②に三枚, ③に四枚</p>

		<p>・半紙は 9 枚配布しているが、足りない生徒には追加で渡す。また、生徒によって書く速度が異なるため、無理に時間内に 9 枚すべてを使用させる必要はない。</p> <p>※ただし、上記の旨を事前に生徒に伝えてしまうと「何枚か書けば終わってもいい」と解釈される恐れがあるため、伝えることはせず時間いっぱい書くように指示することが望ましい。</p> <p>・三種類の書風の書作する際のポイントをきちんとおさえ、“書き分ける”ことを意識するように伝える。</p> <p>&lt;机間巡視&gt;</p> <p>・①と②③の違いを上手く表現できていない生徒には、②③の特徴などを再度口頭で説明する。口頭では理解しづらい生徒の場合、指導者が実際に筆で書いて見せる、生徒の手を持って一緒に書くなどの方法をとる。</p> <p>・一つの書体に集中し過ぎて、時間内に他の書体を書くことが出来なくなる生徒がいることが予想されるため、時折注意を促す必要がある。</p> <p>例)「あと〇〇分なので、まだ一つ目の人は一旦切り上げて次の作品を書きましょう」</p>
<p>まとめ 15分</p>	<p>○作品を三種類一枚ずつ選び、提出する</p> <p>・提出する際、作品の裏に鉛筆またはシャーペンで名前、組、番号を記入する。</p>	<p>◇作品を提出させる</p> <p>・作品を三種類の中から一枚ずつ選ばせて、裏に鉛筆またはシャーペンで組、番号、名前を記入し提出させる。</p> <p>・作品選びに困っている生徒がいれば、補助する。</p>

	<p>○次回の授業内容を聞き、創作の題材についての決まりをノートに書いておく</p> <p>・片付け ・挨拶</p>	<p>◇次回の授業内容について説明する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字仮名交じりの書の第一時で予告していた創作について、次回までに各自題材を考えてくるように伝える。</li> <li>・題材についての決まりは以下の五点として板書し、ノートに書いておくように指示する。</li> </ul> <p>①漢字と仮名（ひらがな又はカタカナ）が最低でも一文字ずつは含まれていること</p> <p>②文字数は五文字以上</p> <p>③詩集，ことわざ，漫画，歌詞など出典は自由とする（自作の言葉でも良い）</p> <p>④題材の内容は基本的には自由であるが、ただし、人を傷つける言葉や差別的な内容のものは避ける</p> <p>⑤授業中携帯電話を使用することは出来ないので、パソコンや携帯電話で調べた場合は、ノートや紙にメモをしてくること</p> <p>(※) ⑤の決まりについては、メモ等を忘れて携帯を使用したいという生徒が出るのが予想されるため、特に注意をするように促す。</p> <p>・挨拶</p>
--	--	---

## 【本時の目標】

- ・ 創作の流れを理解し，創作活動に意欲的に取り組む。

	○学習内容	◇指導内容 ・ 指導上の留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 挨拶</li> <li>・ 本時の説明を聞き，創作に必要な物（題材が載っている本，メモやノート）を準備する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 挨拶，出欠確認を行う。</li> <li>・ 本時で学習する内容について説明する。</li> <li>・ 本時から取り組み始める創作課題について，先週指示した通り題材を選んできたかどうかを確認する。</li> </ul>
展開 40分	○創作の流れについて説明を聞き，理解する（10分）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ワークシートと集字プリントを配布し，名前，組，番号を記入させる。</li> </ul> <p>◇創作課題の取り組み方について説明する</p> <p style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">創作の流れ</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①題材を決定し，ワークシートに記入する</li> <li>②なぜその題材を選んだか，理由を記入する</li> <li>③作品をどのような雰囲気にしたいか考え記入する</li> <li>④字書を用いて集字する（漢字のみ）</li> <li>⑤鉛筆・シャーペンを用いて草稿を書く（構成・文字の大小・文字の配置など）</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒によって進度が異なるため，一度全体に創作の流れを説明し，黒板に板書しておく。 →次に何をすればよいか分からなくなった際，黒板を見ることで思い出すことができる。</li> <li>・ ①の題材が見つからなかった，または考えてきていない生徒がいることが予想されるため，指導者がいくつか題材をピックアップしプリントにして準備しておくことが望ましい。また，題材は可能な限りバラエティーに富んだものにするように心がける。</li> </ul>

	<p style="text-align: center;"><b>集字のポイント</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自身が表現したい雰囲気に近い字を選ぶ。</li> <li>・可能な限り、書風は揃える。</li> <li>・集字プリントに記入する際、線で書くのではなく字典の通りに肉付けをする。</li> </ul> <p>○創作課題に取り組む (30 分)</p> <p style="text-align: center;">題材決め ↓ ワークシートの記入 ↓ 集字 (漢字のみ) ↓ 草稿作成</p>	<p>例) ことわざ, 名言, 漫画の中の台詞, 歌詞, 俳句など</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・①で、落款の書き方についても触れておく。 詩→○○の詩    名言、台詞→○○の言葉 歌詞→○○の詞    短歌→○○のうた 俳句→○○の句    本、小説の文→○○より</li> <li>・③については、可能であれば具体的 (力強い線で強い雰囲気、全体的にこじんまりとして寂しい雰囲気、など) に記入することが望ましいが、言葉として思いつかない場合は抽象的な表現でもよいことを伝える。</li> <li>・④の集字については、一学期のうちわ創作の際に一度集字の方法を学んでいるため、説明は省略する。(ただし、覚えていない生徒が多い場合は簡潔に説明する)</li> <li>・⑤の草稿は、ワークシートにスペースが二つあるが特に制限はなく、使用するのは一つでもよい。また、二つ以上書く場合はワークシートの裏に書くように指示する。</li> </ul> <p>◇各自、創作課題に取り組むように指示をする</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・題材のプリントが必要な生徒には、5 分ほど経ってから希望者にだけ渡すようにする。(自分で言葉を選ぶ、考えることも大切なので、最初からプリントを渡してしまうと考える力が育たない。)</li> </ul>
--	--	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集字の作業に入る生徒は、各自で字典を取りに行く</li> </ul>	<p style="text-align: center;"><b>構成について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品の構成について、書き手以外の方が“読める”ことを条件に基本的には自由とする。</li> <li>・参考例として教科書に掲載されている作品例や、指導者が書作した作品を黒板に貼るようにする。掲示する参考例は、本時の創作課題と同じ半紙サイズが望ましい。</li> </ul> <p>※本時では授業用に制作した作品六点と、以前制作し折帖形式で残していた作品の計七点を掲示・展示。</p> <p>&lt;机間巡視&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・旧字表記などで、集字をされていて見つからない字がある生徒は補助をする。全員に貸し出している字典(五體字類/西東文房)には載っていない字もあるため、その場合は別の字典(本時では書道字典/角川)を貸し出す。</li> </ul>
<p style="text-align: center;">まとめ 5分</p>	<p>○ワークシートを提出する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・組, 番号, 名前を記入しているか再度確認する。</li> <li>・ワークシートは自己判断で持ち帰り, 次回までに活動を進めておいてもよい。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> </ul>	<p>◇ワークシートと集字プリントを提出させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・組, 番号, 名前の記入を再度確認させる。</li> <li>・次回の授業時には草稿まで仕上げて書作に入らなければならないため, 進みの遅い生徒は自己判断でワークシートを持ち帰ってもよいことを伝える。ただし, 持ち帰る場合は次回忘れずに持ってくるように注意をする。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> </ul>

## 【本時の目標】

- ・ 草稿に固執せず、様々な表現を試みる。
- ・ 自分が表現したいものに近づけるように努力する。

	○学習内容	◇指導内容 ・指導上の留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 挨拶</li> <li>・ 本時の説明を聞き、何について学ぶのかを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 挨拶, 出欠確認を行う。</li> <li>・ 前時の振り返りを行い, 本時で学習する内容について説明する。</li> </ul>
展開 35分	<p>○前時の続きから創作活動を行う (15 分/平均的なスピードの生徒)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集字の字典が必要な場合は各自で取りに行く。</li> <li>・ 草稿まで書き終えたら前に見せに行き, OK が出てから墨液や筆の準備をする。</li> </ul>	<p>◇前時に引き続いて, 創作活動を行わせる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ それぞれ続きから始めるように指示し, 参考作品などは前時と同様に前に掲示または展示しておく。</li> <li>・ 次の時間で作品を仕上げなければならないため, すべての生徒が本時の間に書作に入ることが望ましい。そのため, 進みの遅い生徒には声をかけるなどの配慮が必要である。</li> <li>・ ワークシートが出来上がった (最後の感想の部分は除く) 生徒は, 前に見せに来るように指示する。</li> <li>・ ワークシートをチェックし, 草稿の落款などの部分に不備があれば指摘して訂正させる。この時, あまりに乱雑なもの (走り書き, 集字がきちんと出来ていないなど) はやり直しをさせる必要がある。</li> <li>・ ワークシートが完成して OK を出した生徒には, 書作の準備をするように指示する。</li> </ul>

	<p>○草稿をもとに書作する (20 分/平均的なスピードの生徒)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・草稿に固執せず, 様々な表現を試す。</li> <li>・書作に行き詰まった場合は, 前に見せに来て指導を受ける。</li> </ul>	<p>◇草稿をもとに書作させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒によって取り組み始める時間が異なるため, 半紙は枚数を決めず自由に取りの形にする。</li> <li>・一度草稿通りに書作してみて, 他の案が思い浮かんだ場合はそちらも試してみるように指示する。一つの表現に固執するのではなく様々な表現に取り組み, 自身が表現したいものにより近づけることが大切である。</li> <li>・一度書作して見せに来た生徒には, 生徒の意向 (作品をどのような雰囲気にしたのかなど) を確認してから指導を行う。</li> <li>・指導を行う際は “個の表現” を伸ばすために生徒の意向を尊重することを心がけて, 極力 “添削” ではなく “提案” という形をとることが望ましい。</li> </ul> <p>例) 「こういう表現があるよ」 「文字の大きさを～にしてみたらどうだろう」</p>
<p>まとめ 10分</p>	<p>○作品とワークシートを提出する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品を一枚選び, 作品の裏に鉛筆またはシャープペンで組, 番号, 名前を記入して提出する。</li> <li>・挨拶</li> </ul>	<p>◇作品とワークシートを提出させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品を一枚選び, 作品の裏に鉛筆またはシャープペンで組, 番号, 名前を記入して提出させる。</li> <li>・提出する作品は “よく書けた” ものではなく, “こういう表現にしたい” というものを選ぶように指示する。</li> </ul> <p>※提出された作品とワークシートをもとに, 指導者が参考作品を書くため</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次回で作品を仕上げることを伝えておく。</li> <li>・挨拶</li> </ul>

## 【本時の目標】

- ・自分が表現したいものにより近づけるように努力する。
- ・ワークシートの記入で自身の創作活動について振り返り，分析する。

	○学習内容	◇指導内容 ・指導上の留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> <li>・準備</li> <li>・本時の説明を聞き，何について学ぶのかを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶，出欠確認を行う。</li> <li>・本時で学習する内容について説明する。</li> </ul>
展開 30分	○手本を参考にして書作し，作品を仕上げる (25～30分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートを返却，参考作品を配付する。</li> <li>・半紙を7枚ずつ配布する。</li> </ul> <p>◇書作に入り，本時で作品を仕上げさせる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者が書作した参考作品は，必ずしもその通りに書かなければならないということはない。手本ではなく一つの作例として捉えるように伝える。</li> <li>・作品の文字数に個人差があるため，配布した半紙をすべて使用する必要はないことを伝えておく。また，足りない生徒には追加で渡すようにする。</li> <li>・落款までが作品であり，落款で失敗してしまうこともあるため，最後まで気を抜かないように注意をする。</li> </ul> <p>&lt;机間巡視&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・表現方法は定まっているが自分の思うように書作できていない生徒には筆遣い，運筆，墨の潤滑，字形などについてアドバイスをする。口頭での説明で不十分な場合は，指導者が実際に書いているところを見せる，一緒に筆を持って書かせるなどの指導方法をとる必要がある。</li> </ul>

	<p>○ワークシートを完成させる (残り時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品を書き終えたら、ワークシートの最後の項目を記入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配布した半紙をすべて使用して書作を終えている生徒には、技法について指導を行い、半紙を追加で渡して時間いっぱいより良い作品の制作に励むよう促す。</li> </ul> <p>◇ワークシートに感想を記入させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5分前(授業終了20分前)に、その時点で書いている作品を最後の一枚として、書作を終えるように指示する。</li> <li>・作品を書き終えたら、ワークシートの最後の項目(工夫した点、苦勞した点、良かったと思う点)を記入させる。</li> </ul>
<p>まとめ 15分</p>	<p>○作品、ワークシート、手本を提出する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品を一枚選び、作品の裏に鉛筆またはシャーペンで組、番号、名前を記入して提出する。</li> <li>・片付け</li> </ul> <p>○アンケート記入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> </ul>	<p>◇作品、ワークシート、手本を提出させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品は一枚選び、作品の裏に鉛筆またはシャーペンで組、番号、名前を記入し、提出させる。</li> <li>・作品選びで悩んでいる生徒がいる場合は補助をする。</li> </ul> <p>◇アンケートの記入を指示する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・片付け、作品提出が終わった生徒はアンケート用紙を受け取り、アンケートの記入をするように指示する。</li> <li>・アンケートは授業終了後に提出して帰るように伝える。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> </ul>

かんじかなま  
漢字仮名交じりの書に関するアンケート

以下の質問に関して、該当するものに○をしてください。

1. 漢字仮名交じりの書はどうでしたか？  
( とても楽しかった・楽しかった・どちらでもない  
・楽しくなかった・まったく楽しくなかった )
2. 1の回答について、楽しかった理由、または楽しくなかった理由を聞かせてください。「楽しかった」「楽しくない」「面白くない」などの漠然とした言葉ではなく、具体的な理由を書いてください。  
例) ○○が楽しかった/面白かったから。  
△△が面倒だったから。○△○なところが嫌だったから。

3. また「漢字仮名交じり文」を書きたいと思いますか？  
( とても思う・思う・どちらでもない・思わない・まったく思わない )
4. あなたは書道の中で、どの学習が好きですか？（複数可）  
( 漢字・仮名・篆刻・漢字仮名交じりの書 )
5. “書道” に対してどのようなイメージを持っていますか？

## 【本時の目標】

- ・漢字仮名交じりの書について学び，理解する。
- ・多様な表現に触れその技法と効果を理解し，基礎的な能力を養う。

	○学習内容	◇指導内容 ・指導上の留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> <li>・本時の説明を聞き，授業の流れを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶，出席確認</li> <li>・本時の学習内容を説明する。</li> </ul>
展開 30分	<p>○漢字仮名交じりの書，著作権について学ぶ（5～10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・概要の振り返り</li> <li>・著作権について</li> </ul> <p>○名筆（または指導者が制作した作品）を鑑賞する（5分）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートを配布し，説明を聞きながら空欄を埋めていくように指示する。</li> </ul> <p>◇漢字仮名交じりの書について説明する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2年時に学習した内容を振り返り，漢字仮名交じりの書の概要について再度簡単に説明を行う。</li> <li>・2年時では触れていなかった“著作権”について説明をする。</li> </ul> <p>◇名筆の鑑賞を行い表現の多様さを伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞させる名筆は，出来る限り表現方法（墨の濃さや書風，構成など）の異なるものを複数準備する。</li> <li>・名筆は教科書に載っているものだけでなく，指導者自身が「面白い」「紹介したい」と感じた作品を用いることが望ましい。（→より深い説明をすることが出来る）</li> <li>・生徒の状態によっては，名筆鑑賞では興味関心をもつことが出来ない場合がある。その場合，2年時と同様に生徒が興味を持つことが出来るような題材を用いて指導者が作品を制作する必要がある。</li> </ul>

	<p>○多様な表現の技法とその効果について学ぶ (15 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートの表の部分に、それぞれの表現方法で期待できる効果を書き込む。</li> </ul> <p>○実際に様々な表現技法を試してみる (10 分)</p>	<p>◇多様な表現について説明する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業者が書作した作品 (同じ言葉を異なる表現で書作したもの) を数種類黒板に掲示していき、発問を交えながら各々の表現方法にどのような効果があるかということの説明する。(欄外の表を参照)</li> </ul> <p>例)「墨を薄くしてみると、元の作品と比べてどんな雰囲気になったかな？」</p> <p>(※)表は一例に過ぎない。個々によって感じ方や表現方法は異なるため、その都度柔軟に対応することが望ましい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートの表の部分に、それぞれの表現方法で期待できる効果を書き込むように指示をする。その際、授業内で挙げられた(発問で出た意見)効果以外にも自身で思うものがあれば、併せて書き込むように伝える。</li> </ul> <p>&lt;机間巡視&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・淡墨は墨の扱い方が難しいが、まずは一度触れさせてみる大切である。</li> <li>・楽しい、悲しい、寂しい、力強い、優しいなど、自分でテーマを考えて表現方法を試してみるように指示する。</li> </ul>
<p>まとめ 10 分</p>	<p>○ワークシートを提出する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートが完成していることを確認してから提出する。</li> <li>・片付け</li> <li>・挨拶</li> </ul>	<p>◇ワークシートを提出させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートが完成していることを確認させてから、提出させる</li> <li>・挨拶</li> </ul>

表現	期待できる効果	表現	期待できる効果
墨の潤滑	<ul style="list-style-type: none"> <li>・潤 → 迫力がある 強調</li> <li>・渴 → 弱々しい 厳しい</li> </ul>	字形	<ul style="list-style-type: none"> <li>・角ばっている → 強い 鋭い</li> <li>・丸みがある → 優しい 柔い 可愛い</li> </ul>
墨の濃淡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・濃 → 力強い</li> <li>・淡 → 優しい 弱々しい</li> </ul>	字の大小	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大 → 迫力がある 賑やか 強調する</li> <li>・小 → 静か 寂しい</li> </ul>
全体構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余白なし → 力強い 賑やか</li> <li>・大きく余白を作る → 寂しい ゆったり</li> </ul>	運筆の遅速	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遅い → ゆったり 優しい</li> <li>・速い → 勢いがある 鋭い</li> </ul>

## 【本時の目標】

- ・表現することの“楽しさ”を知り、積極的に取り組む。
- ・同じ題材を用いても、人によって表現や雰囲気が変わることを理解する。

	○学習内容	◇指導内容 ・指導上の注意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> <li>・本時の説明を聞き、授業の流れを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶、出席確認</li> <li>・本時の学習内容を説明する。</li> </ul>
展開 35分	<p>○前時に引き続いて、様々な表現技法を試してみる (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートで前時の学習を振り返りながら、様々な表現に取り組んでみる。</li> </ul> <p>○お題に沿って書作 (25分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5人前後のグループを作り、お題に沿って書作してグループ内で作品を鑑賞し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時で提出させたワークシートを返却し、ワークシートで前時の学習を振り返りながら様々な表現を試すように促す。</li> </ul> <p>◇指導者 (または生徒) が提示したお題に沿って書作させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5人前後のグループに分けて行う。</li> <li>・お題は漢字→平仮名→漢字仮名交じり文と段階を分けるようにする。</li> </ul> <p>(※) 漢字・平仮名のみで書作し、“表現する”という行為に慣れさせてから漢字仮名交じり文に入る、という指導をする。</p> <p><b>お題の例</b></p> <p>漢字…犬, 雨, 風, 夏 平仮名…ねこ, さくら, ふゆ 漢字仮名交じり…雨が降っている, ねこが鳴く</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お題ごとにグループ内で相互鑑賞を行い、同じお題でも個々によって表現が異なることを理解させる。</li> </ul>

		<p>&lt;机間指導&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・表現方法を考える際に迷った場合は、ワークシート内の表（前時で記入したもの）を参考にするように伝える。</li> <li>・指導者側は“表現する楽しさ”を味わうことが出来るような雰囲気作りを心がける。（生徒の表現を“尊重”する必要がある。）</li> </ul>
まとめ 10分	<p>○作品提出</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提出する際、作品の裏に鉛筆またはシャーペンで名前、組、番号を記入する。</li> <li>・片付け</li> <li>・挨拶</li> </ul>	<p>◇作品を提出させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各お題につき1枚ずつ作品を選び、裏に鉛筆またはシャーペンで組、番号、名前を記入し、提出させる。</li> <li>・挨拶</li> </ul>

表現	期待できる効果	表現	期待できる効果
墨の潤滑	<ul style="list-style-type: none"> <li>・潤 → 迫力がある 強調</li> <li>・渴 → 弱々しい 厳しい</li> </ul>	字形	<ul style="list-style-type: none"> <li>・角ばっている → 強い 鋭い</li> <li>・丸みがある → 優しい 柔い 可愛い</li> </ul>
墨の濃淡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・濃 → 力強い</li> <li>・淡 → 優しい 弱々しい</li> </ul>	字の大小	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大 → 迫力がある 賑やか 強調する</li> <li>・小 → 静か 寂しい</li> </ul>
全体構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余白なし → 力強い 賑やか</li> <li>・大きく余白を作る → 寂しい ゆったり</li> </ul>	運筆の遅速	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遅い → ゆったり 優しい</li> <li>・速い → 勢いがある 鋭い</li> </ul>

## 【本時の目標】

- ・前時で学習した多様な表現方法を実践する。
- ・歌を聴いて感じたことや、歌詞に対して自身がつイメージを書として表現する。

	○学習内容	◇指導内容 ・指導上の留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> <li>・本時の説明を聞き、授業の流れを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶，出欠確認</li> <li>・本時の授業の流れを説明する。</li> </ul>
展開 35分	<p>○『糸』（中島みゆき）を聴く (5分)</p> <p>○ワークシートに記入する (5～10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞の中から書きたい箇所を選択し、歌を聴いて感じたことや自身の気持ちを元に作品の雰囲気を決める。</li> </ul> <p>例) ・あたたかい ・力強い ・悲しい, 寂しい etc</p>	<p>◇歌詞を印刷したプリント，本時で使用するワークシートを配布</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞を目で追いながら聴くように促す。</li> <li>・歌を聴いている最中に書きたいと思う箇所があれば，その都度プリントにチェックを入れるように指示する。</li> </ul> <p>◇『糸』（中島みゆき）を流す</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・集中して歌を聴かせるために，聴いている間は周囲と雑談をしないように厳しく注意を促す。</li> <li>・<u>ここでどれだけ，生徒を歌に集中させることが出来るかによって，本時の学習(授業)が成り立つかどうかが決まる。</u></li> <li>・生徒の希望があれば再度歌を流す。</li> </ul> <p>◇書く歌詞と作品の雰囲気を決め，ワークシートに記入するように指示する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・書作する作品のサイズは半紙で，縦と横は自由であることを伝える。</li> <li>・書く歌詞の長さに制限は設けない。</li> </ul> <p>※ただし全文，漢字1文字，平仮名1文字は避けさせる。</p>

	<p>○作品制作 (20 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・表現方法に悩む場合は、第 1 時で使用したワークシートの表 (表現とその効果をまとめたもの) を参考にしてもよい。</li> <li>・落款の入れ忘れに注意する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書きたい箇所が複数ある場合は、無理に一つに絞らせる必要はない。複数の素材を用いて表現を試みることで、“個の表現”の多様化が期待できる。</li> </ul> <p>しかし、最終的に提出する作品は一つだけであるということを伝えておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートに歌の感想やイメージ、書作する作品の雰囲気を入力する際、箇条書きまたは文章のどちらでも良いという指示をする。</li> </ul> <p>→文章の上手い下手ではなく、自分の言葉で、感じたままに書くことが大切。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・表現方法を考える際、ワークシートの表 (第 1 時で表現方法とその効果をまとめたもの) を参考にするように助言する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・半紙を 6 枚配布する。</li> </ul> <p>&lt;机間指導&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージ通りにいかない生徒には、墨の濃淡や潤濁、筆運びや構成、字形など様々な面からアドバイスを行う。</li> </ul> <p>※あくまで“<u>アドバイス・助言</u>”に。</p> <p>「このように書きましょう」という指導は、生徒の自己表現の幅を狭めてしまう恐れがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本時までで学習した様々な表現方法 (淡墨や濃墨、字配りなど) を試みるように助言をする。</li> </ul>
--	--	---

	<p>○ワークシート記入・提出 (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・苦勞した点や工夫した点, 上手くいった点の記入は, 出来るだけ詳細なものにする。</li> </ul>	<p>◇ワークシートを記入するように指示し, 提出させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・苦勞した点や工夫した点, 上手くいった点などを出来るだけ細かく記入させる。</li> </ul>
<p>まとめ 10分</p>	<p>○作品を提出する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス, 番号, 名前の記入, 落款の有無などを確認して作品を提出する。</li> </ul> <p>・片付け</p> <p>・挨拶</p>	<p>◇作品を提出させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提出する作品を1枚選び, 裏に鉛筆でクラス, 番号, 名前を記入して提出させる。</li> </ul> <p>※<u>落款の書き忘れに注意。</u></p> <p>忘れていた場合は鉛筆ではなく必ず筆で書かせる。(落款も作品の一部であるという意識をもたせる)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・書いた作品はすべてホッチキスで綴じてまとめ, 提出作品と一緒に提出をするように指示をする。</li> </ul> <p>→どのように試行錯誤したのかということや, 成長の過程を確認するため)</p> <p>・挨拶</p>

## 参考文献

- ・『墨 第一一九号』, (株)芸術新聞社, 1996
- ・金子一夫, 『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』, 中央公論美術出版, 1999
- ・『自由画の黎明 信州・竜丘小学校作品集』久山社, 1993
- ・『高等学校学習指導要領解説 芸術編』, 文部科学省, 2009